第十四巻

まおゆう

Archenemy and Hero

魔王勇者

「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」

漫画原作

石田あきら　橙乃ままれ

キャラクター原案 水玉雲之介・toi8

Kadokawa Comics A

まおゆう 魔王勇者

まおゆう
©魔王勇者
第四十四話

ズオオオ

漫画原作
石田あきら 橙乃ままれ
キャラクター原案 水玉螢之丞・toi8

おおかみ

Archenemy and Hero 魔王勇者

「この我のものとなれ、勇者よ」 「断る！」

第四十四話 Archenemy and Hero 44th chapter

『ひかりのたま』

原作・漫画
石田あきら 橙乃ままれ
キャラクター原案 水玉螢之丞 vol.8

魔王勇者

Archenemy and Hero

——「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」——

第四十四話 Archenemy and Hero 44th chapter

『ひかりのたま』

まおゆう
魔王勇者

第十四巻

漫画　石田あきら　原作　橙乃ままれ
キャラクター原案　水玉雲之浦・toi8

第四十四話 Archenemy and Hero 44th chapter　001
『ひかりのたま』

第四十五話 Archenemy and Hero 45th chapter　057
これは…飽和攻撃だ

第四十六話 Archenemy and Hero 46th chapter　109
還らぬ者の名にかけて

まおゆう魔王勇者

「この我のものとなれ、勇者よ」「断る!」

Archenemy and Hero

第十四巻

漫画原作
石田あきら 橙乃ままれ

キャラクター原案
水玉螢之丞・toi8

コラムページ
竹之内大輔（レッカ社）
野村昌隆

まおゆう 第十三巻のあらすじ

Lectures on Archenemy and Hero
Outline of volume.13

「魔王」と「勇者」の劇的な出会いから3年。人間界の「冬越し村」を拠点に始まった二人の活動によって、世界は大きく変化していった。魔王がもたらした技術や知識によって、「冬の国」や「鉄の国」、「氷の国」といった南部の人々の暮らしは大きく改善。国力をつけた三国は「三国通商同盟」を締結し、大陸に君臨する「聖王国」や「中央聖光教会」からの自立を果たした。さらには、大陸東部に位置する五カ国と七つの独立都市をふくめた「南部連合」の結成に至る。

一方、魔界では魔王の地位を狙う蒼魔族の王子・「蒼魔の刻印王」によって、魔王暗殺未遂事件が発生した。この事件は各氏族長たちが結束する大きなきっかけとなり、地上へ侵攻した蒼魔族の討伐をはじめ、新たに開始された街道の整備事業などを通じて、それまで存在していた氏族間の対立が徐々に融解しつつあった。また、蒼魔族が地上へ侵攻したことを受け、南部連合は勇者の仲介で魔界からの使者・「妖精女王」との対話を開始。停戦、さらには平和条約締結に向けての大きな一歩を踏み出すことになる。

こうした動きがある一方、依然として大きな問題が存在していた。それは、聖王国の「王弟元帥」、並びに聖光教会の首長である「大主教」を擁した「第三次聖鍵遠征軍」の存在だった。

「聖骸」を求めて行動を起こした聖鍵遠征軍は、旧「白夜の国」に駐屯。いよいよ本格的に魔界への侵攻を開始しようとしていた。当面の目標は魔界の入り口に位置する開門都市。すでに人間と魔族が共存している世界唯一の場所である。

魔王や「女騎士」が対策を練るなか、魔王のもとを離れた「メイド姉」や「貴族子弟」らも、戦争を止めようと独自に行動を開始。

「女魔法使い」から魔王と勇者という存在がもつ本来の役割について聞かされた勇者もまた、新たに発覚した世界の危機を回避すべく、単身で聖鍵遠征軍へと潜り込む。それぞれの思惑、それぞれの理想を胸にした多くの人々が、新たな戦場となる開門都市を目指して動き出そうとしていた――。

魔王

「外なる図書館」で得た知識をもとに、世界の変革を目指す魔族の王。現在、聖鍵遠征軍のマスケットへの対抗手段を模索している。

メイド長

魔王の側近。彼女の幸せを願い、その夢を叶えるため、手足となって尽力している。

メイド姉

魔王の館で働いていたメイド。戦争を止めるため、独自に地下世界に乗り込む。

女魔法使い

元「勇者の一行」のひとり。知識を武器に、勇者の力となるべく独自に行動している。

メイド妹

メイド姉の妹。食いしん坊が高じて料理の道に目覚め、現在は鉄の国で修業中。

冬寂王

冬の国の王。鉄の国や氷の国とともに中央と決別。新たに「南部連合」を結成した。

青年商人

人間界で最大の経済団体「同盟」の幹部。情勢の変化に乗じ、経済面での改革を目指す。

執事

元「勇者の一行」のひとり。冬寂王の執事をつとめつつ、諜報活動なども行っている。

火竜公女

火竜大公の娘。開門都市の魔族の代表をつとめ、現在は都市の整備を進めている。

東の砦将

聖鍵遠征軍の元士官。開門都市の住人からなる衛門族の長として魔族会議に加わった。

女騎士

元「勇者の一行」のひとり。魔王の正体を知ったうえで彼女に協力している。

勇者

魔王とともに歩む青年。女魔法使いから魔王や勇者という存在がもつ本質を聞き、破滅の未来を回避すべく聖鍵遠征軍に同行している。

王弟元帥

聖王国の王の弟。人間界で英雄と目される実力者で、第三次聖鍵遠征軍の指揮を執る。

百合騎士団長

大主教に仕える百合騎士団の団長。聖光教会の教義と大主教に絶対の忠誠を誓っている。

灰青王

中央諸国で若き英雄と称される「霧の国」の王。聖鍵遠征軍では前線指揮官をつとめる。

奏楽子弟

「紅の学士」の教えを受けた森歌族の少女。現在は聖鍵遠征軍に紛れ込んでいる。

大主教

「光の精霊」を崇める聖光教会の長。「聖骸」を求めて第三次聖鍵遠征軍を起こした。

土木子弟

「紅の学士」の教えを受けた鬼呼族の青年。現在は開門都市の改築を手がけている。

妖精女王

妖精族の長

碧鋼大将

機怪族の長

蒼魔の刻印王

蒼魔族の長

鬼呼の姫巫女

鬼呼族の長

巨人伯

巨人族の長

銀虎公

獣牙族の長

紋様の長

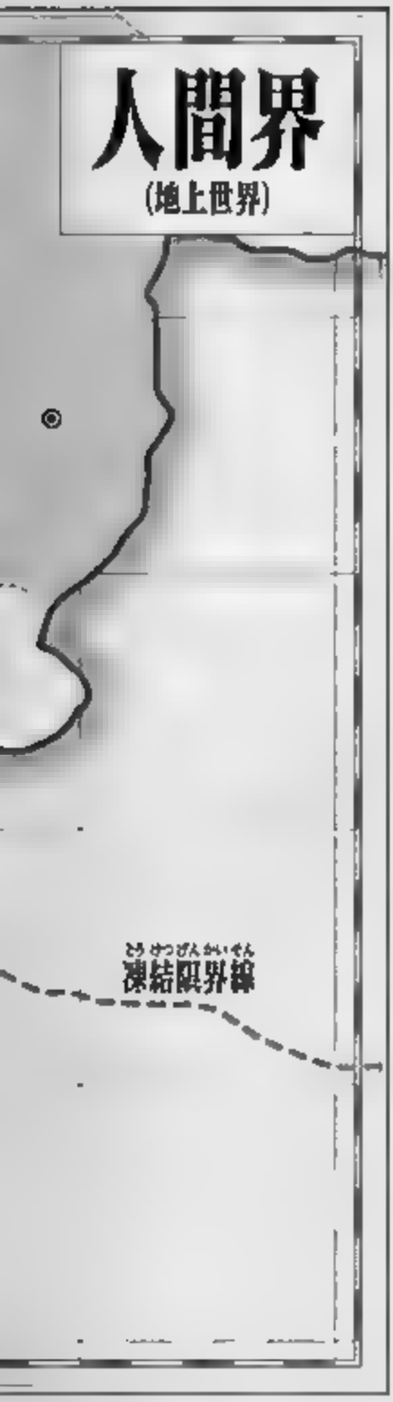
人魔族の長

火竜大公

火竜族の長

まおゆう 主要人物の所在

Lectures on Archenemy and Hero
Location of the Characters



魔王

女騎士

魔王と女騎士は、聖鍵遠征軍が所有するマスケットに対抗する手段を模索。魔王は新たにライフルを開発した。ふたりは勇者とある約束をしていたが、勇者が旅立ったためにそれは先延ばしとなった。

冬寂王

執事

執事は療養中だったが、傷もかなり回復したらしく、部下たちとともに独自にマスケットへの対策を練っている。冬寂王は、王としての仕事をこなすかたわら、魔界へ赴く準備を始めている。

メイド妹

軍人子弟

軍人子弟は、魔界へ赴く準備を開始。彼と行動をともにしていたメイド妹の所在は定かでないが、現在も鉄の国にとどまっていると思われる。

青年商人

青年商人は、同盟の力で物流に圧力をかけ、マスケットの製造速度を鈍化させた。また、聖光教会が独占していた為替の分野に踏み込むべく、その準備を開始する。

王弟元帥

大主教

勇者

王弟元帥と大主教は、聖鍵遠征軍を率いて極大陸へ出航。勇者は魔界の案内人という名目で、彼らと行動をともにしている。

メイド姉

貴族子弟

メイド姉と貴族子弟は、傭兵団とともに白夜の国で聖鍵遠征軍が備蓄していた硝石を処分。船を奪って極大陸に向かい、そのまま魔界の火竜山脈へと向かった。

火竜公女

土木子弟

聖鍵遠征軍の侵攻に備え、都市整備と防壁の構築を進めている。

開門都市について

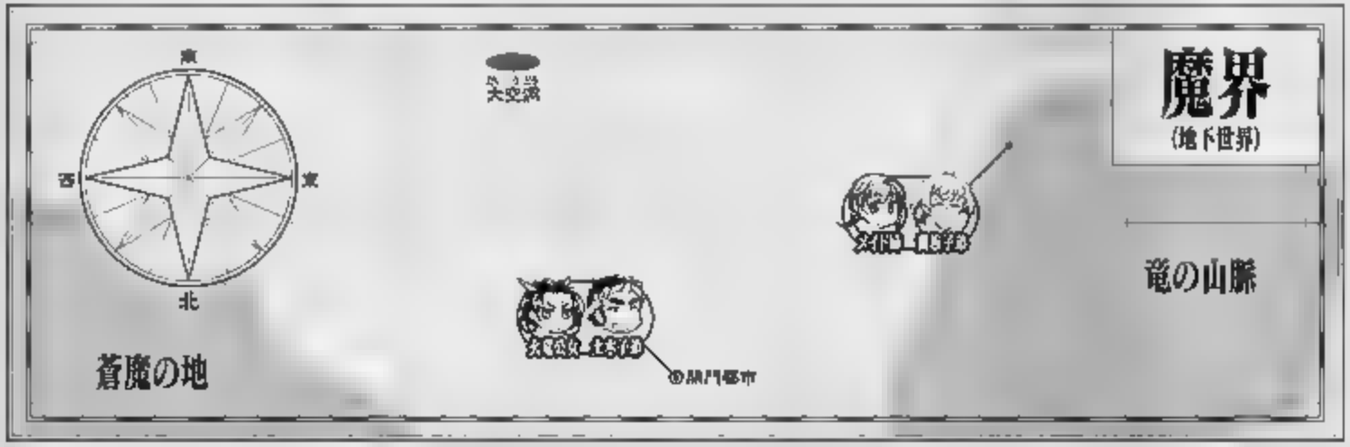
開門都市は、人間界と魔界とを結ぶゲート(現在は大空洞)にもっとも近い位置にある都市。第一次聖鍵遠征軍によって占領されたが、黒騎士に変装した勇者によって遠征軍が撤退。取り残された人間の民間人と魔族とが、共存する都市となった。魔族にとっては聖地という意味合いがあり、昔は絶えず巡礼者が訪れていたという。その一方で、人間界と魔界とが接する位置にあることから、古くから戦乱にさらされてきたようである。最近では、魔族側の代表をつとめる火竜公女らの主導によって、都市の整備計画が進められていた。しかし、王弟元帥や大主教によって第三次聖鍵遠征軍が組織されたことを受け、防衛力強化の必要性から、土木子弟らによって新たな防壁の建築が急ピッチで進められている。

波頭の国
聖王国
聖王都
翡翠の国
渦の国
山の国
潮の国
猪首の国
麦の国
銅の国
赤馬の国
幕の国
南部連合
霧の国
銅の国
稍の国
青月湖
樫の国
冬越し村
鉄の首都
鉄の国
白夜の国
氷の国
冬の王都
冬の国
極光島
聖霊遠征軍進路
北
西
東
南
大空洞
極大陸

南
西
東
北
大空洞
蒼魔の地
築門都市

まおゆう 主要人物の所在

Lecture on Archenemy and Hero
Location of the Characters



魔王 女騎士

魔王と女騎士は、聖霊遠征軍が所有するマスケットに対抗する手段を模索。魔王は新たにライフルを開発した。ふたりは勇者とある約束をしていたが、勇者が旅立ったためにそれは先延ばしとなった。

冬寂王 執事

執事は療養中だったが、傷もかなり回復したらしく、部下たちとともに独自にマスケットへの対策を練っている。冬寂王は、王としての仕事をこなすかたわら、魔界へ赴く準備を始めている。

メイド妹 軍人子弟

軍人子弟は、魔界へ赴く準備を開始。彼と行動をともにしていたメイド妹の所在は定かでないが、現在も鉄の国にとどまっていると思われる。

青年商人

青年商人は、同盟の力で物流に圧力をかけ、マスケットの製造速度を鈍化させた。また、聖光教会が独占していた為替の分野に踏み込むべく、その準備を開始する。

王弟元帥 大主教

勇者

王弟元帥と大主教は、聖霊遠征軍を率いて極大陸へ出航。勇者は魔界の案内人という名目で、彼らと行動をともにしている。

メイド姉 貴族子弟

メイド姉と貴族子弟は、傭兵団とともに白夜の国で聖霊遠征軍が備蓄していた硝石を処分。船を奪って極大陸に向かい、そのまま魔界の火竜山脈へと向かった。

火竜公女 土木子弟

聖霊遠征軍の侵攻に備え、都市整備と防壁の構築を進めている。

開門都市について

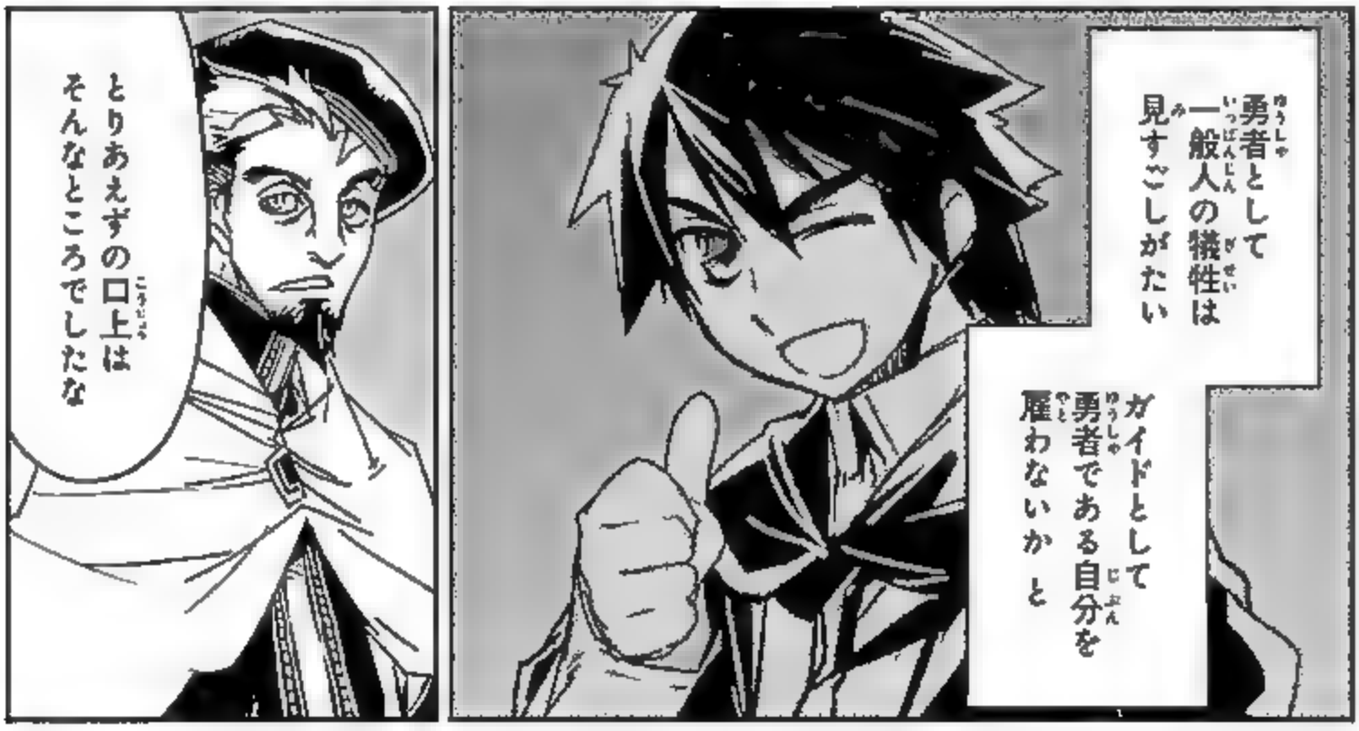
開門都市は、人間界と魔界とを結ぶゲート(現在は大空洞)にもっとも近い位置にある都市。第一次聖霊遠征軍によって占領されたが、黒騎士に変装した勇者によって遠征軍が敗退。取り残された人間の民間人と魔族とが、共存する都市となった。魔族にとっては聖地という意味合いがあり、昔は絶えず巡礼者が訪れていたという。その一方で、人間界と魔界とが接する位置にあることから、古くから戦乱にさらされてきたようである。最近では、魔族側の代表をつとめる火竜公女らの主導によって、都市の整備計画が進められていた。しかし、王弟元帥や大主教によって第二次聖霊遠征軍が組織されたことを受け、防衛力強化の必要性から、土木子弟らによって新たな防壁の建築が急ピッチで進められている。

おおおお

すげえ！
おおお
鉄みたいな皮膚の犀の魔物を一撃で！
ありがとうございました！
なんのなんの
おおお
へー
ほー
聞いながら歩いたほうがいいぞ
皮袋から避けてくれる

どうやらずいぶん馴染んでいるようだな
ええ

魔界の
魔物は強い
独自の
生態や毒を持つ
ものも多い
これだけ大人数で
魔界へと渡ると
その犠牲者も
多くなる


勇者として
一般人の犠牲は
見すごしがたい
ガイドとして
勇者である自分を
雇わないか と
とりあえずの口上は
そんなところでしたな

どのような
目論見でしょう
勇者は
さて…
どうだろうな

勇者について
昔に聞いた話ですが

強大な戦闘力に
まかせた行動をする
多少子どもじみた
正義感を持つ
冒険者だったと

そう
聞いています

私も
そう聞いたな

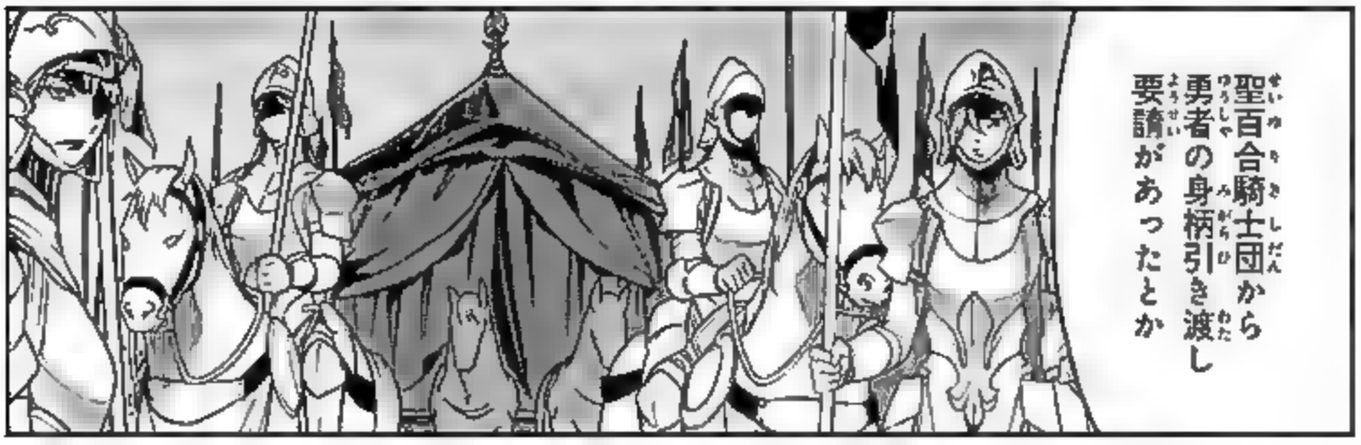
しかし
今の印象は
かなり違う

確かに
損得抜きで
動きそうな熱は
感じたが

それとは
別に
世界に損得勘定が
あること自体は
理解していると
思わされた

なんの
考えもなしに
きたわけでも
なかろう

しかし
あれだけの戦闘力…
脅威ではありませんか
居所のわからぬ
脅威よりは
わかる脅威のほうが
まだ対処のしようが
あるというものだ
そのためにも
手元に置いておいた
ほうがよいだろう


聖百合騎士団から
勇者の身柄引き渡し
要請があったとか

勇者は
光の精霊の使徒
そうである以上
その存在は
精霊の恵みであり
教会が
世話をするに
ふさわしい となる
何を
考えているん
でしょう

大主教殿も
見きわめたいので
あろうよ
勇者を

鉄の国

よく来たで
ござるね！
こちらへどうぞ

やぁ
お久しぶり！
おじゃま
しまあす

赤馬の武王
梢の君主のご一行は
すでにご到着です
湖の国の女王や
自由都市の領主様も
数日中には
到着のご予定

お歴々は？
ぼちぼちで
ござるね

おーきな
会議になりますね
そうで
ござるね

内容を考えると
なかなかに
頭が痛いです
けどね
魔界…
地下世界への
派兵の是非ですね

おぬしは
どう考えるで
ござるか？
まあ
財布事情からすれば
考えるまでもなく
反対でござろうが
……
ぐび…

そのうえ
今回の戦は
人類の剣たる
聖鍵遠征軍による
魔界遠征
いくら一時は
マスケットを
向けられた
とはいえ
同じ人類である
我らが
それに対して
文句をつける
筋合いのものでも
ないのかもしれない
でござるが…

いえ
？
私は文句を
つけることに
賛成ですよ

そう
私個人は
今回の戦争には
介入すべきだと
考えています
どうしてでござる？
他に選択肢がないからです
今回
遠征軍が大勝し
その勢力を伸ばせば
中央諸国家は
ともかく
聖光教会の権勢は
止まるところを
知らないでしょう
忘れて
ならないのは
我ら南部連合国家は
異端指定を受けている
ということです

我らが
生き延びる
ためには
三勢力——
中央の国家
魔界
そして私たち
南部連合による
勢力の均衡が
必須です

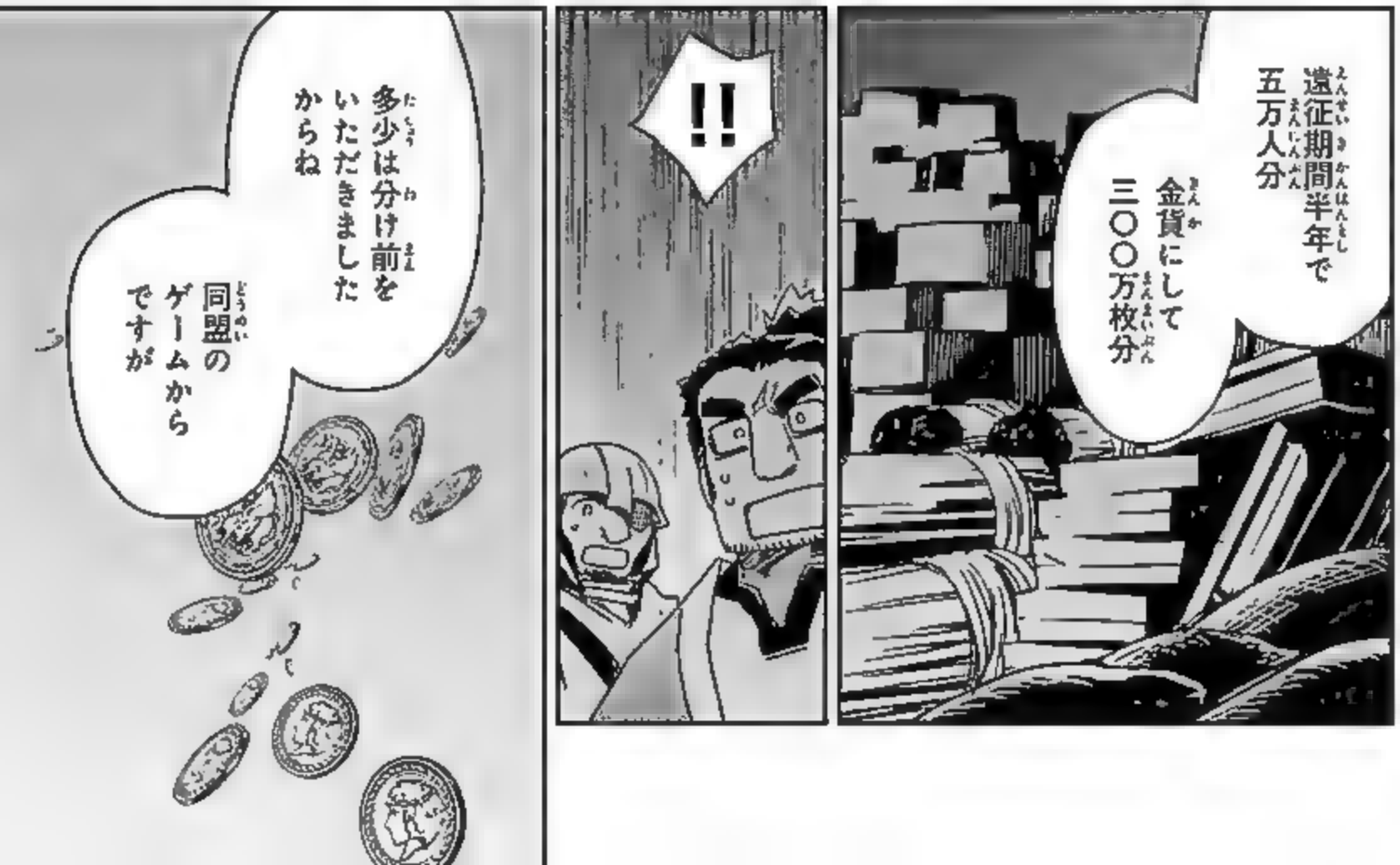
ですから
遠征軍を
止めることには
賛成なのです
しかし
そうとなると
相当 条件が
厳しい
ザ…
どういう
ことです？

今回の戦について
私たちが
民が納得するような
大義をこしらえる
のは難しい
遠征軍から
自国を防衛する
わけではないし
その状況で
民に負担を
求めた場合
反対勢力の意見が
噴出する可能性が
低くない

それを
防ぐためには
大義の面で
なんらかの理由を
つける必要がある
それに南部連合として
まとまったとはいえ
私たちの軍事力は
中央に比べて
はるかに小さい
少ない兵力で
事態を打開しなければ
ならない

たしかに
聖鍵遠征軍の
兵力三〇万を
正面から受け止めて
押し止める兵力は
我らにはないで
ござる
それは？

冬の国の
国家備蓄を
やりくりして
遠征用物資を
別途集積して
きました
おお
どの程度あるので
ござるか？


遠征期間半年で
五万人分
金貨にして
三〇〇万枚分
!!
多少は分け前を
いただきました
からね
同盟の
ゲームから
ですが

ですが
私にできるのは
情けないですけれど
そんな程度です
兵の指揮を
執ることも
できなければ
この戦を
押し止める方法も
わからない
ガヨ…

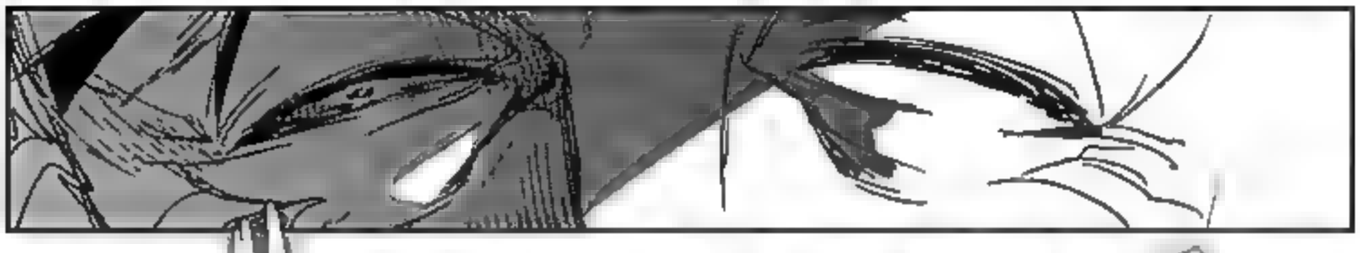
拙者は
軍人でござる
命ぜられなければ
地下世界には
行けぬでござる
しかし
気がはやるので
ござる…
大事なことを
やらねばならぬ
気がするのでござる

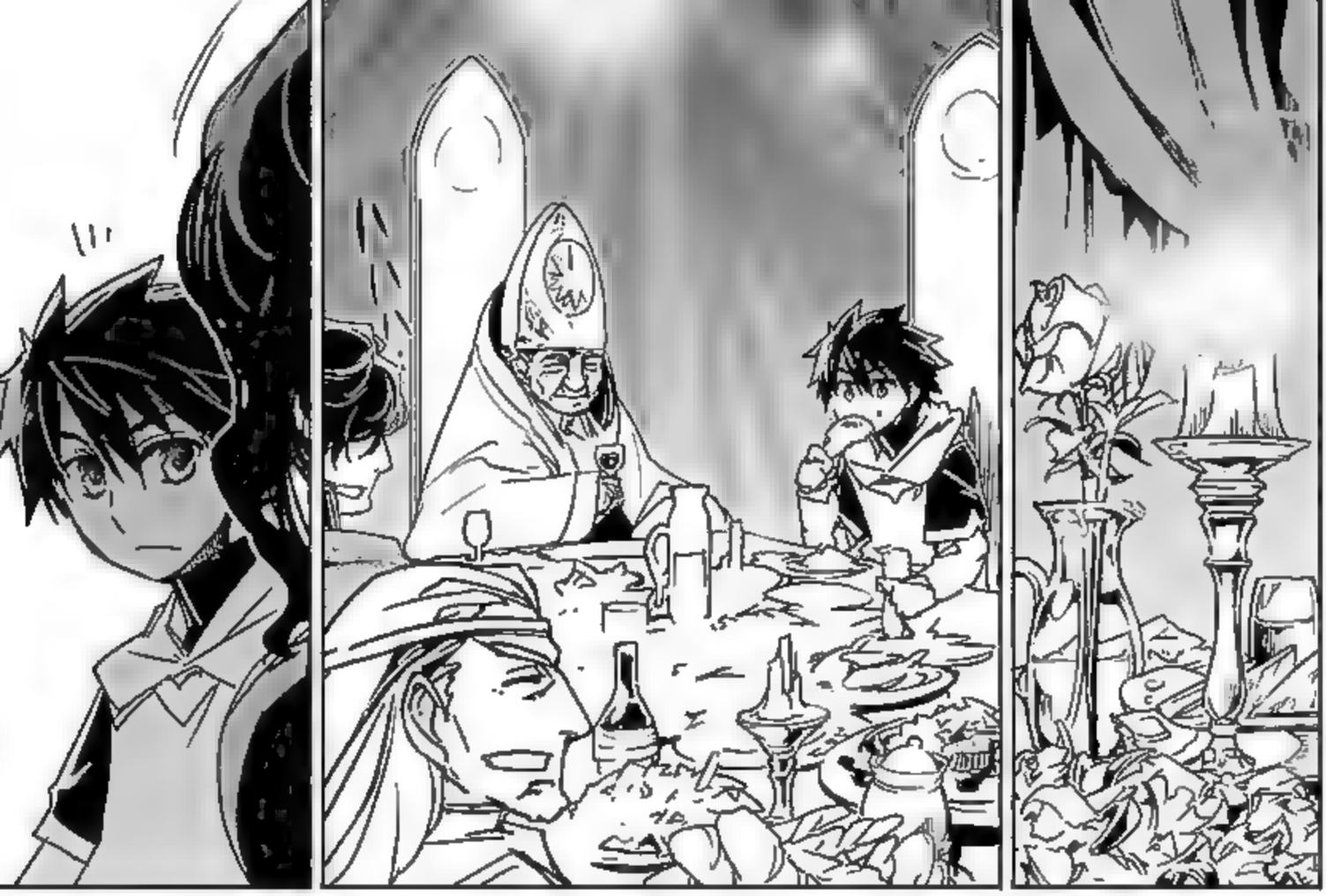
心が
あせるので
ござるよ
早くしろ！
間に合わなく
なるぞ！
そんな声がどこからか
聞こえてくるように
思えてならないの
でござる

会議には
拙者も出るで
ござる
わかりました
支援はすると
します
全力を
尽くすで
ござるよ
微力です
けれどね

カッ
・・・
大主教様の
おなりです

勇者の功績と武勇
そして我々の聖戦の勝利に精霊の恵みがあらんことを
大主教





どうでしょう
勇者様
こたびの遠征では
これからは我ら
聖百合騎士団の幕舎に
いらっしゃいませんか？
清らかな乙女の
騎士たちが
俗世の汚れを
洗い流しますわ

いや
あ――…
俺の汚れは
俺が背負いながら
やっていきますよ

ではせめて
聖光教会で
お世話を…
その辺りは
まぁ
そっちと
王弟元帥さんとで
相談して決めて
くれれば

騎士隊長
フラれて
しまいましたね
すべて
精霊の御心
しかたありません

鉄の国
宮廷 大会議室

魔界へと向かった遠征軍は総勢三〇万
その兵力は強大無比
魔界は その脅威にさらされているだろう
我らがいかに対処すべきか諸公の意見を求めたい
出兵するや否や？

だがしかし
我らが行ったところで何ができるか
さよう
魔族との平和条約を結んだとはいえヤツらと共同戦線を張る必要もない

むしろ良い機会なのではないか？
我ら南部連合の経済は活性化している
彼らが戦争している間は我らの力を蓄えるべきだ
戦争により商いが活性化するとは古来よくいわれるところ
説得力はありますな…
ざわ
ざわ…

失礼
各国の代表者の方々
冬の国の財務長です
私が 財務 商業の専門家の立場から申しあげられること
それは「戦争により経済が活性化する」という言葉の欺瞞性です
大局的にいってそのような事象は存在しません
戦争で世界が豊かになることはありません
まさか?
実際 古来いわれてきたことではないか
何を言いだすのだ

戦争は
ありとあらゆる
物資を必要と
します

食料や武器
衣類や防寒具
燃料
生活消耗品

移動のための
さまざまな
乗り物

そして今回の
マスケットの
登場で

弾薬までもが
消費されるように
なりました

これらの
社会財を
消耗しながら

戦争は新たな
どういう富を
作り出しますか？

たとえば
四頭の豚を
買ってくれば
翌年には八頭になる

それが富が
増えるという
ことでしょう

戦争が本当に
富を生み出すと
思えますか？

戦争によって
豚が殺される

兵によって
畑が焼かれる

戦争は巨大な
消費である一方

富を生み出すための
施設や機能の
破壊でもあるのです

である以上
戦争が総体として
富を生み出すなどと
いうことはない

それどころか
巨大な浪費と
いえるでしょう

戦争によって
かろうじて
あるといえるのは
局所的な
富の移動だけです
まず
考えられるのは
「戦争を行いながらも
その費用を他者へと
押しつけられる
存在が行う戦争」です
戦費を
すべて他者に
押しつけることが
できるのであれば
戦争というのは
確かに魅力的な
巨大消費です
自分から
戦争を仕掛け
しかし戦費は
他者の財布に
まわせるとしたら
原理的には
無限に財産を
殖やすことさえ
可能です
古の時代
略奪を目的に
行われていた
戦争とはこれに
あたります
略奪という形で
戦費をまかなって
いたのです
これは現在でも
敗戦側の賠償金
という形で
存在します
賠償金を
もっと進んだ形で
考えるのならば
恫喝的外交が
あげられます
つまり
戦争するぞ
という脅しで
他者からお金を
巻きあげる

次に
考えられるのは
戦争の当事者
ではない第三者が

自国の商品を
戦争の当事者に
販売する場合です

自国が被害を受けない状態が
保証されているのならば

戦争に関わる国々は
魅力的な市場となる

「特需」などと
呼ばれる現象が
これに該当します

それがまさに
今の南部連合の
位置ではないか

聖鍵遠征軍が
魔界へと向かって
いるおかげで
現に我らの
経済は活性化
している

どう情勢が動くのか
傍観するのも
ひとつの手であろう

いつから
我ら南部連合は
第三者になったで
ござるか？

誰だ？

うちの
護民卿だ

あのマスケットの
向けられる先が
我らでなかったことに
理由などござらん

あの霊穂ヶ原の戦いで
我ら鉄の国の軍が
かろうじて生き残ったのは

蒼魔軍に…
そして聖鍵遠征軍に
共に対峙した
魔族の助けがあって
こそでござる

二万五千の
蒼魔軍は
我らの軍を
全滅させることが
可能でござった

ところが三〇万の
聖鍵遠征軍は
我らの王国すべてを
幼子にいたるまで
地上から抹消する
ことすらできるので
ござるよ？

現場から
付け加えることは
もう一点あります

今回の
聖鍵遠征軍は
我ら人間が
かつて経験した
どの戦よりも
長距離の遠征であり
最大級の
規模です

これが
現在推定される
聖鍵遠征軍の
維持費です

月当たり維持費

食費 100万枚
＋
船舶維持建造費 50万枚
＋
武器調達費 50万枚
＋
マスケット弾丸費 100万枚
＝
金貨 300万枚

我々が今まで
経験してきた
どんな戦争でも
見たことがない
数字です

ざわ
ざわ…

月に
300下……？

とすると
この軍を維持する
ためには
「維持するための
戦争と勝利」
が必要になる

なぜなら
軍というのは
戦争をする
ためのもので
基本的には
戦争をしない軍は
無駄飯食らいなわけ
ですからね

そう考えると
我々が
直面している現実は
安全とはほど遠いと
いえるかと思います

長期的に考えて
我らがまったく
巻き込まれない可能性を
財務長殿はどの程度と
見積もっておられる？

ゼロです

論外だ

思い出して
ください
我らは
異端指定を
受けてるんですよ

……

無論
戦争になる
とは限らぬ
中央の聖王国や
教会に毎年のように
莫大な上納金を納め
奴隷のような
国家になれば生き延びる
ことはできるでござろう

ずいぶん
偏った意見では
あると思うが
私はおおむね
真実ではあると
考える
いかがだろう
諸王よ

我らはそもそも
中央の圧政を嫌い
その横暴を嫌い
連合に身を
投じたのだ
後退する
つもりなら
最初から
参加はしておらぬ
そうですね
……
……

…では
うむ
総大将を
鉄腕王として
我ら南部連合も
魔界へ派兵する
パチ
パチ
パチ

今回の派兵は
あくまで
政治的決着のための
ひとつの手段と
考えるべきだ
…現実問題
我らがどれだけ
総力をふりしぼり
派兵をしたところで
三〇万の遠征軍を
一掃できるはずも
ないですからね

ゆえに派兵の
規模については
慎重な計画を
要する
各国検討に
入ってほしい
ガヤ
ガヤ
ふ…
ふ…

派兵と決まったでござるか
これで拙者も魔界の地へと行けるでござる
大変なのは二かもしれないでござる
そういえば騎士師匠は？
この会議に参加しているもおかしくないはずでござるが…
修道院騎士団と義勇兵をまとめてとっくに出発しちゃいました
なんと
早く追いつかねば…
あのんたら大丈夫かと思う…

ですから
何度も申し上げているとおり
大主教猊下に作戦の変更を取り次いでいただきたい

作戦に変更などありません
全軍をもって開門都市を陥落せしめる
これが大主教猊下のご意志ですわ

開門都市を落としてもまだ終わりではないのです
ここはまだ魔界の玄関口にすぎません
この後魔界の全土を転戦するためには旧蒼魔族領の豊富な鉱物資源とりわけ硝石が必要です
開門都市
蒼魔の都
ゲート
開門都市の前にこちらを落とし魔界における補給拠点とするべきかと

王弟元帥ともあろうお方が心配性ですこと
我らは猊下のご意志に従う光の戦士です
クスクス
兵の疲労？弾薬と食料？
そのような甘えは純然たる信仰と精霊の祝福の前に吹き飛びましょう
ねえ
灰青王様？
兵については掌握ができるのでしょう？
おまかせを
そのための前線司令官ですからね
取り込まれたか…

どうでしょう
ここは軍を
二分しては

二正面作戦は
定石からいえば
悪手ですが

さいわい
聖鍵遠征軍には
それを可能にする
だけの兵力がある

王弟元帥には
五万の兵力を率いて
蒼魔軍の領地を
落としていただく

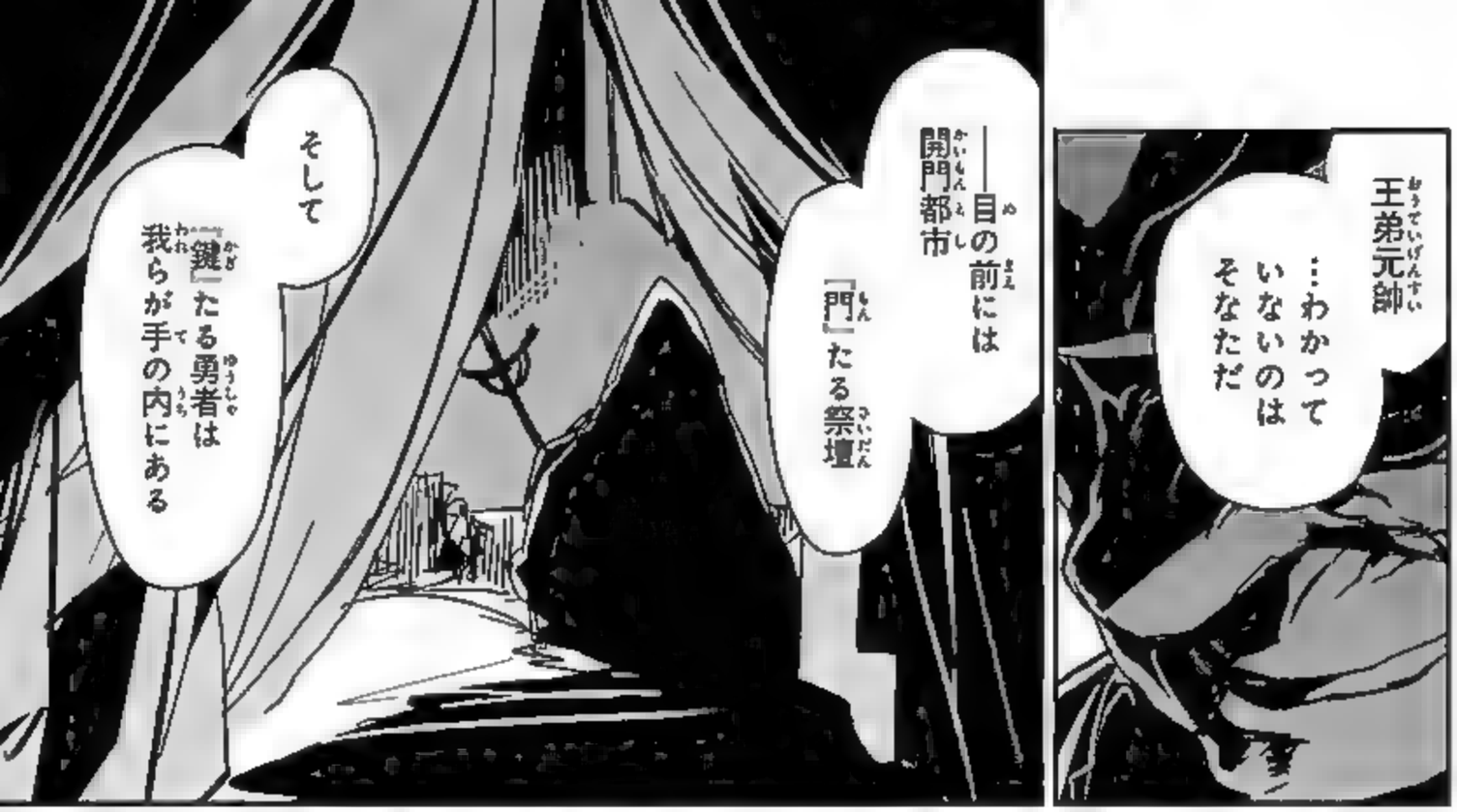
そして開門都市
攻略戦には一五万の
軍を率いてあたる

開門都市
蒼魔の都
15万
5万

…いかがです？

……
承知した

ク
クククク……


王弟元帥
…わかっていないのはそなただ
——目の前には開門都市『門』たる祭壇
そして
『鍵』たる勇者は我らが手の内にある

回り道をする必要がどこにある…？

現在聖鍵遠征軍はこの開門都市から一八里の地点におり
早ければ明後日にも襲いかかってくるかと思われます

あまりにも
膨大な数の軍なので
確実な把握は
できませんが
二〇万に
迫る軍を抱えて
おります

二〇万…
あらためて聞くと
気が遠くなりますな
我らは
総勢六万に
すぎませぬ

いくつかの
斥候の報告では
隊を二分する
動きもあるなどと
あります

少なくとも
我らには
豊富な糧食と
地の利がある
やはり
打って出るべき
だろう

この都市に新しい防壁が完成しかけておるとは聞いておるが
一度も実戦に用いたことがない防壁をどこまで信じてよいかはわからぬ
それに報告によれば人間の遠征軍の大半は正規の軍人ではない
とくに緒戦においては士気に乱れがあるだろう
そこをつき野戦にてできるだけの数を削ぐ
しかし遠征軍には魔王殿も危惧されるマスケットがあります…
副官殿の気持ちもわからないではないが
いくら脅威のマスケットといえどいまだ練度の足りぬ新兵器

状況公表後
開門都市を
脱出した者も
いるが
この都市を
守るために
残ってくれた
者も多い
義勇兵も
予想より多く
集まった
だが それでも
数では圧倒的に
我らが劣る
奇襲をして
敵の数を減らす
必要があろう

どうだった
この先が
どうやら
火焔山脈だな
この山道の先が
火竜一族の城
ということで
間違いないらしい

門には衛兵が詰めていたが
どいつもこいつも強そうだ
とても俺たちじゃ…
どうするんだ？
ここに限ってはどうにかなる方法があります
？
止まれ！
汝ら何者だ！
ミシャキ…
名を名乗れ

ま!?
魔王様!
なんだって!?
私だ
間違いない
魔王様だ
俺は忽鄰塔で
お目にかかって
いるんだ
魔王って
いってるよ
本当に魔王に
化けられるのか
ぜんぜん
姿形が違うじゃ
ないか!?
代行は
占拠係り
だ、たのや…
火竜大公に
取り次いで
くれないか
内密
かつ急ぎの
用件だといって
もらえばよい
は
はい
しかし
この
人間たちは…?

彼らは
人間界から一緒に
旅をしてきた
私の護衛だ
我らの旅は
これからも長い
ねぎらって
やってくれると
助かる
は
わかりました
おい
至急大公に
取り次ぐんだ

代こ…
魔王殿

「心配ない」

話し合いで
片が付く
で
なければ
あがいても
意味はない

こちらでございます
ありがとう
ここからは内密の話だ
下がっていてくれ
は
…さてお前は何者だ？
その姿は確かに魔王殿だが人間の臭いがするな…
お初にお目にかかります
はい人間です
パァァ

まずは
このように
訪れたことを
お詫びいたします
ふん
この数年で
無礼な闖入者には
慣れたわ
勇者といい
あの男といい
困ったばかり

その礼の
尽くし方は
メイド長に
学んだか
はい
私の先生です
私は
メイド長様と
魔王様に
学びました

…とはいっても
魔王様の
命令や伝言を預かって
伺ったのではありません
現在 私は
魔王様のもとを
離れて活動
しています

誰か もしくは
なんらかの組織の
指示を受けて
いるのか？
いえ
私の意志です
ならば
よかろう
ハハハハ
？

魔界の大氏族
四竜が長
この火竜大公
鷹っても
使い走りごときと
問答する口は
持ち合わせぬ

魔王殿の
姿まで借りて
ここに来た用件を
いうがよい
竜族に
伝わる宝を
お借りしに
まいりました
いえ
返せない
可能性もあるので
お譲りいただけると
うれしいのですが…

何が望みだ？
「ふぶきのつるぎ」か？
それとも「女神の指輪」か？
『ひかりのたま』です
!?
なぜその名を…

終 第四十四話 『ひかりのたま』

第四十二回

戦争や軍隊の維持に必要な軍事費

軍隊の維持や戦争には多額の軍事費が必要になる。これをいかに調達するかは常に為政者の課題だった。

軍隊の維持や戦争には、物資だけでなく兵士たちの人件費なども必要となる。

古くから為政者を悩ませてきた軍事費

善し悪しは別として、戦争は外交手段のひとつである。勝利すれば、衝突の原因となった案件での主張を通せたり、賠償金を得られる場合もある。しかし、こと「生産」ということに限れば、戦争は何も生むことはない。劇中で商人子弟が指摘したように、戦争が巨大な消費、浪費というのは間違いではないだろう。

さて、戦争が巨大な消費である以上、遂行するには多額の経費がかかる。戦費と呼ばれるこの経費をいかにして調達するかは、時の為政者が常に頭を悩ませる課題だった。

古代ギリシャの都市国家や中世における封建社会の騎士たちは、必要な武具を自前で揃えることになっていた。参政権や土地所有を認める代わりとして兵役が課されていたが、こうした時代でも攻城兵器の製造や戦力を増強するために雇う傭兵の報酬など、それなりの戦費は必要だった。

西欧では18世紀頃まで軍事力のほとんどを傭兵が担っていたため、戦争が起こるたびに彼らを雇用する必要があった。しかし、敵と味方の傭兵隊長同士が通じて形ばかりの戦闘を繰り返すことで、互いに雇用主から報酬をせしめるようなこともあったという。

この頃から、すでに戦争の勝敗は純粋な戦闘力の優劣だけでなく、必要な戦費をどれだけ払い続けることができるかという、財政的な能力によっても左右されていた。

のちに戦場の主役が銃や大砲になると、これらを開発、生産するだけでなく、消費する大量の弾薬を確保する必要が生じた。さらには火砲に対抗するための防衛設備の改修費や、戦争の形態が変化したことで増大した補給・運搬に携わる人員の人件費など、戦費を含めた軍事の諸費用は増加する一方となる。

こうした軍事費は、諸都市や商人団体に特権を与えて得た援助金や、さまざまな税金で賄っていた。イギリスのように、新大陸からの船を襲って得た富を軍事費に充てたケースもある。

以後、技術の発展とともにさまざまな新兵器が誕生。これら兵器のハイテク化もともなって、膨らみ続ける軍事費は現代の為政者にとっても、頭の痛い問題となっている。

19世紀初頭のナポレオン戦争では、賠償金を目当てに戦争が行われたこともあった。

同じだけど違う

あいかわらず
詩人さんの
歌と曲は
きれいな
もんだでなぁ
ああ
心が洗われる
ようだべ
だけど
なんだか悲しい
お話だなぁ

その炎の娘と
いうのは
きっと
心のキレイな
娘っ子だったに
違いねぇべ
んだ
んだ
そうだね…
みんなの信じる
光の精霊様と
同じにね…

まおゆう
魔王勇者

第四十五話

私たち人間は
理想郷を滅ぼした
土の氏族の末裔
あなたたち魔族の
先祖は 彼女が
神ではないことを
知っていた
ただ人々の
救済を願った
ひとりの
か弱い精霊だと
知っていた
だから
魔族は彼女を
崇めなかった

ただ尽きぬ
感謝を込めて
伝説へと…
物語へと
残した

しかし
それとは逆に
私たち人間の先祖は
自分たちの氏族が
理想郷を滅ぼしたことに
耐えられなかった
そして
世界が
救われたのは
全知でも全能でもない少女が
命を捨てたためだったことにも
耐えられなかった

だから
彼女を神として
祀り 崇めた

Archenemy and Hero
45th chapter

第四十五話

これは…飽和攻撃だ

…『ひかりのたま』は
竜族に託された
宝物ではあるけれど

同時に それは
儚く移ろう
この世界の一部に
すぎません

永遠では
ないものです

それを用いて
人が何を為すかを
精霊様が
試されるために

あらかじめ
与えられた
ものです

ですから
それをお与え
ください

私が使う
ために

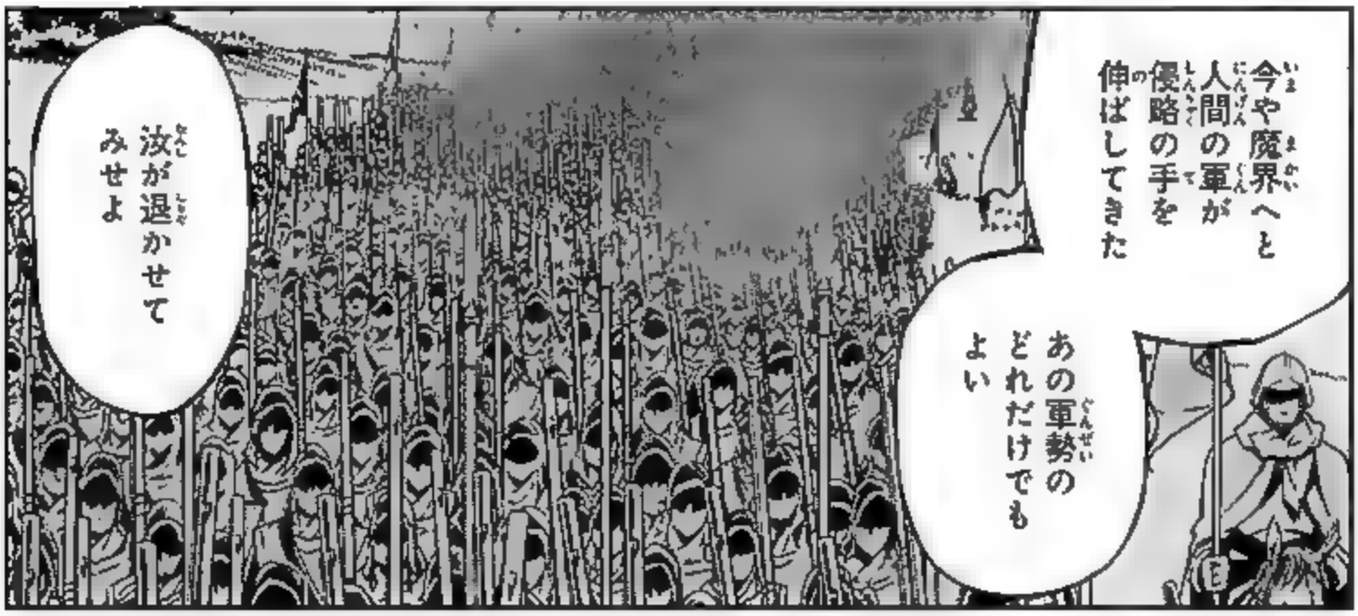
みんなが
「自分の分」の
血を流すために

…汝の言葉は
あるいは
正しいやもしれぬ

しかし
汝が汝の言葉の
正しさを貫くだけの
力を持つのか

どうして
我にわかろう

証明して
みせろ
証明…？
我ら魔族は
行動をもって
そのものの勇を
見定め
信をおけるか
どうかを
判断する


今や魔界へと
人間の軍が
侵略の手を
伸ばしてきた
あの軍勢の
どれだけでも
よい
汝が退かせて
みせよ

我はいっさいの
兵は貸さぬ
汝が
汝の持つ力と
仲間とやらだけをもって
一軍を退かせるのだ
…やれるか？

やりましょう

お心遣いに
感謝します

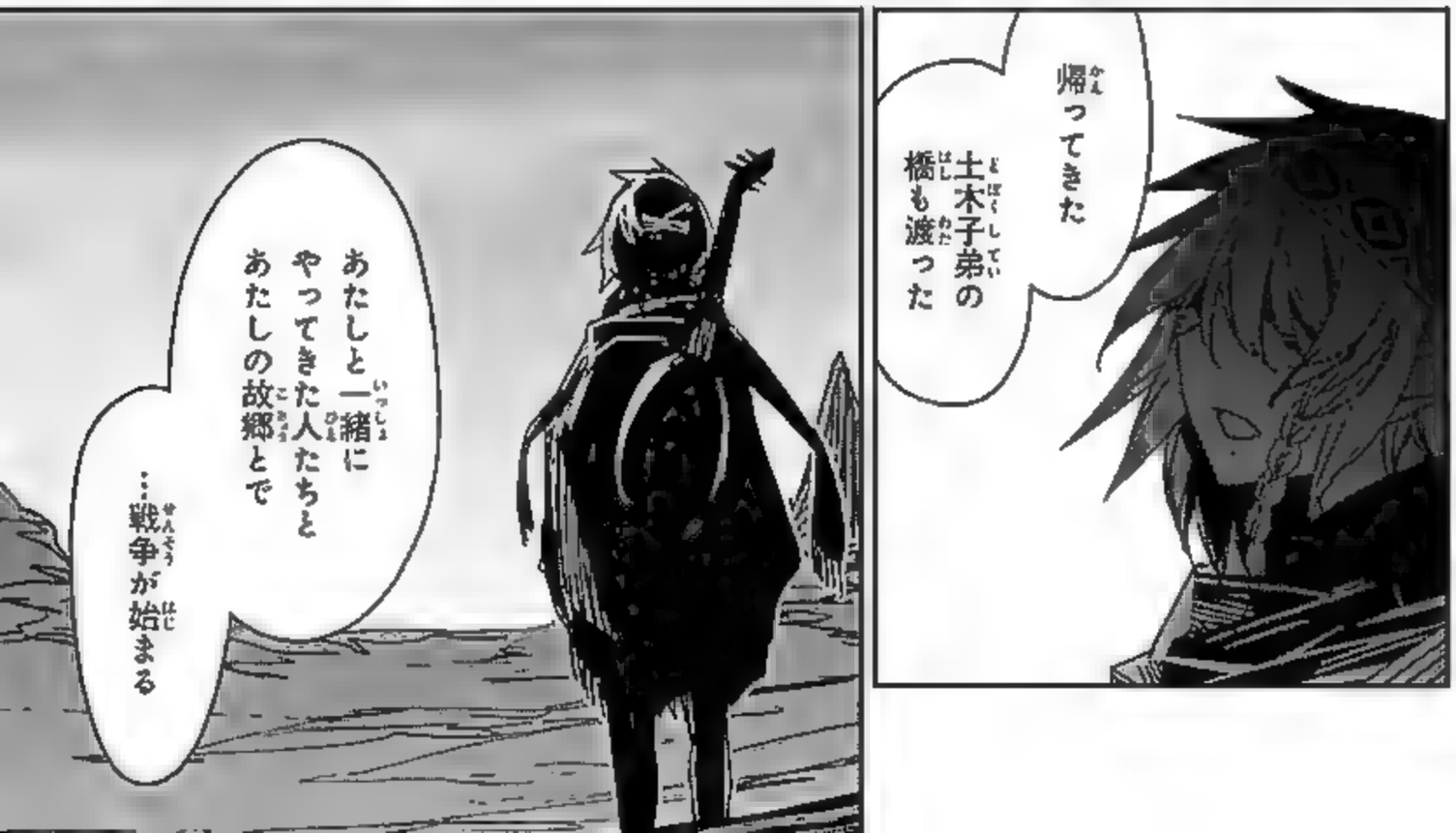
「退かせろ」と
おっしゃって
くださったことに
「殺せ」で
あったならば
私はもし仮に
それに成功しても
その後みんなに
語るべき言葉を
失ってしまう
ところでした

…なぜ笑える

それが先生の
教えですから

お前のような
娘と話すと
目が眩む
魔王殿も
よく飽きもせず
このような
知己や仲間を
次々と作りなさる
この老骨
もはや目のまわる
思いよ

私のこの胸には
宝物があふれて
います
その輝きを
曇らせないために
この足を
止めるわけには
まいりません


帰ってきた
土木子弟の
橋も渡った
あたしと一緒に
やってきた人たちと
あたしの故郷とで
…戦争が始まる

あんなに
あったかかった
人たちなのに
図書館で見たみたいに
みんな冷たくなって
しまう…
どうして…
こんな…

…あたし
ずっと…
ずっと
見てるから

開門都市攻略軍も
そろそろ開戦する
頃でしょうか
どうなる
でしょうね
なに
仮にあちらが
失敗しても
我々の
戦力だけで
いくらでも
取り返しがつく

聖鍵遠征軍の
三〇万という数は
そういう数だ

教会
ですか

それよりも…

近頃の
彼らの横車は
目にあまるものが
あります
元帥閣下は
いかがお考え
なのですか？

…我ら聖王国
中央諸国
いや あの大陸
すべての民は
光の精霊信仰のもと
繋がっている
教会は
必要不可欠で
我らの生活には
欠くことができぬ

単一の教えが
ここまで根付いて
いなければ
今回の
聖鍵遠征軍のような
「自由意思を装った徴兵」
など できはしない

教会は正義ですか…
正義？
そんなものとはなんの関係もないさ

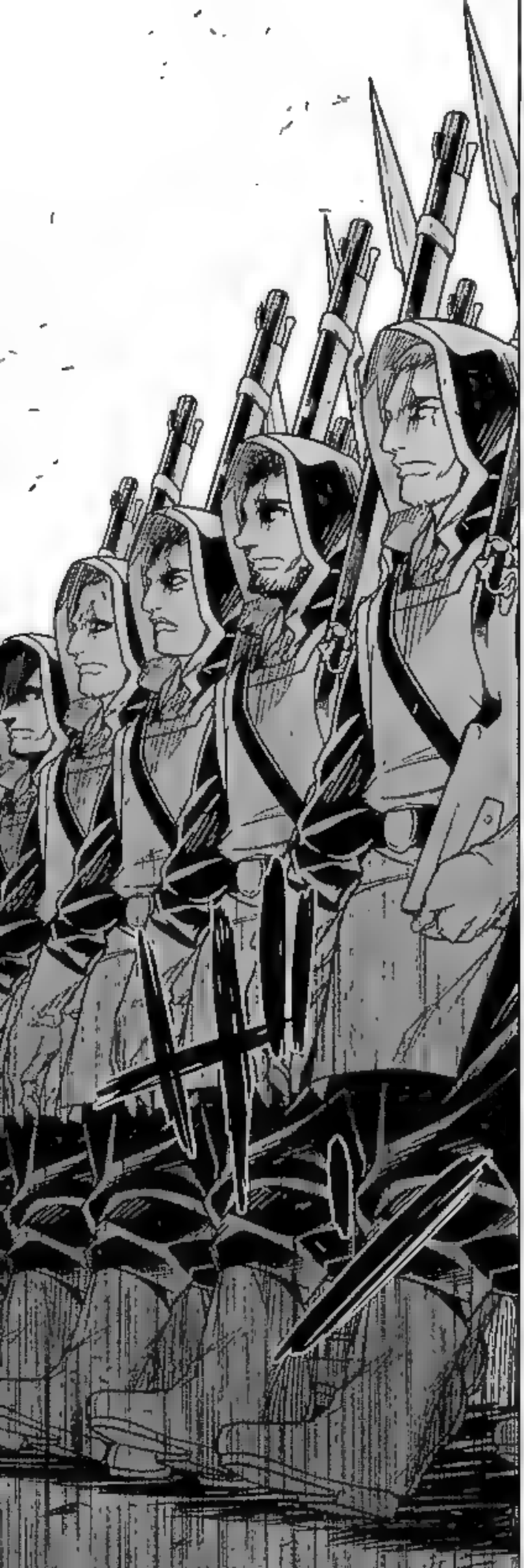
――教会の本質は「時間」だよ
歴史といいかえてもよいだろう
降り積もった歴史が教会の本質であり背景なのだ
千数百年の歴史が教会に正当性と権威を与えている

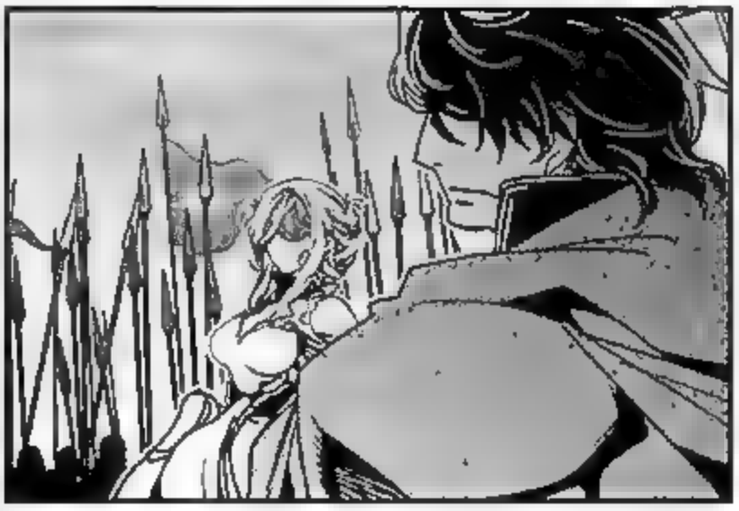
長く続いたものこそが正しいのだ
古いからこそ正当なのだ

そして
その正当を
護ることが
我ら聖王国の
利益と正当性にも
つながる
…開門都市の方は
灰青王と教会に
まかせてみるとしよう

精霊は
欲し給う！
精霊は
欲し給う！
精霊は
欲し給う！

我らが猊下の
ために！
光の精霊
万歳！

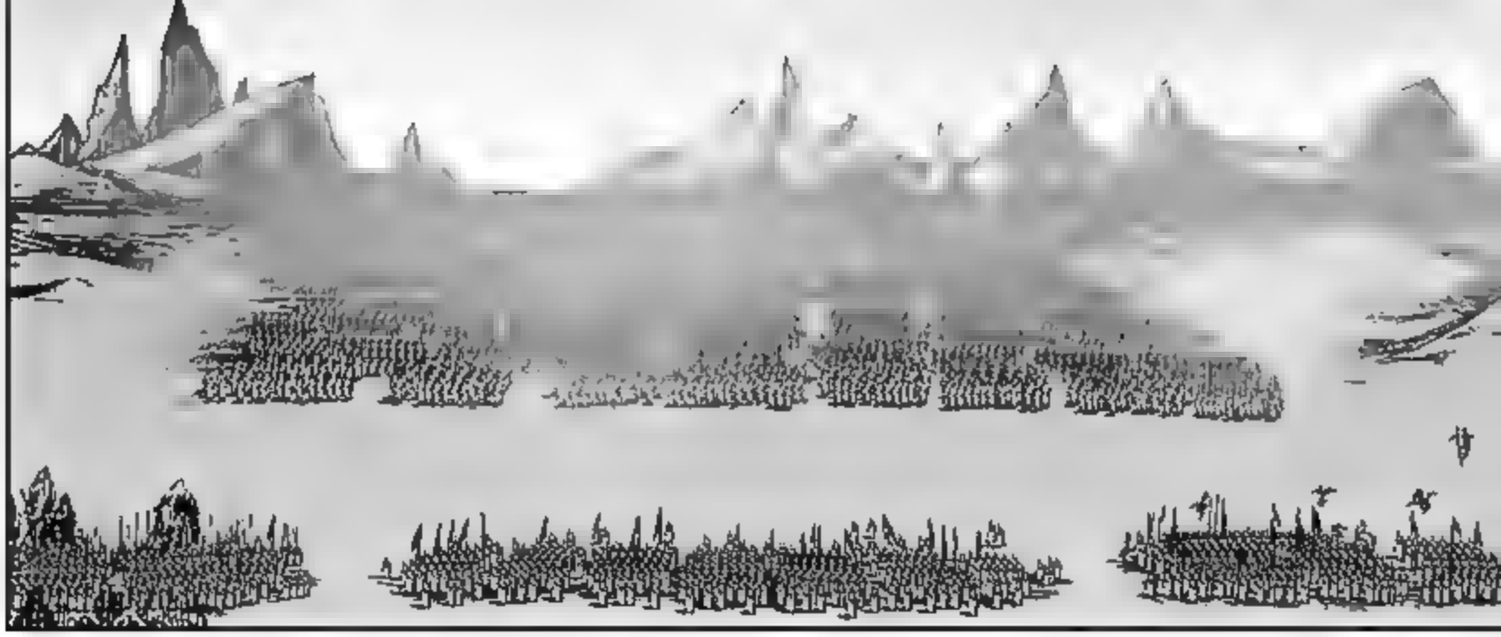




あれが
開門都市…
魔族の軍が
布陣している
ようですね

お手並み拝見と
いこうかしら

勝利は
あなたの唇に
捧げるとしよう



来たか…

軍を二分したと聞いていますがとても信じられません

あの数は圧倒的じゃな

紋様一族から魔術に秀でた者を集め

魔術部隊を編制しました

…

では

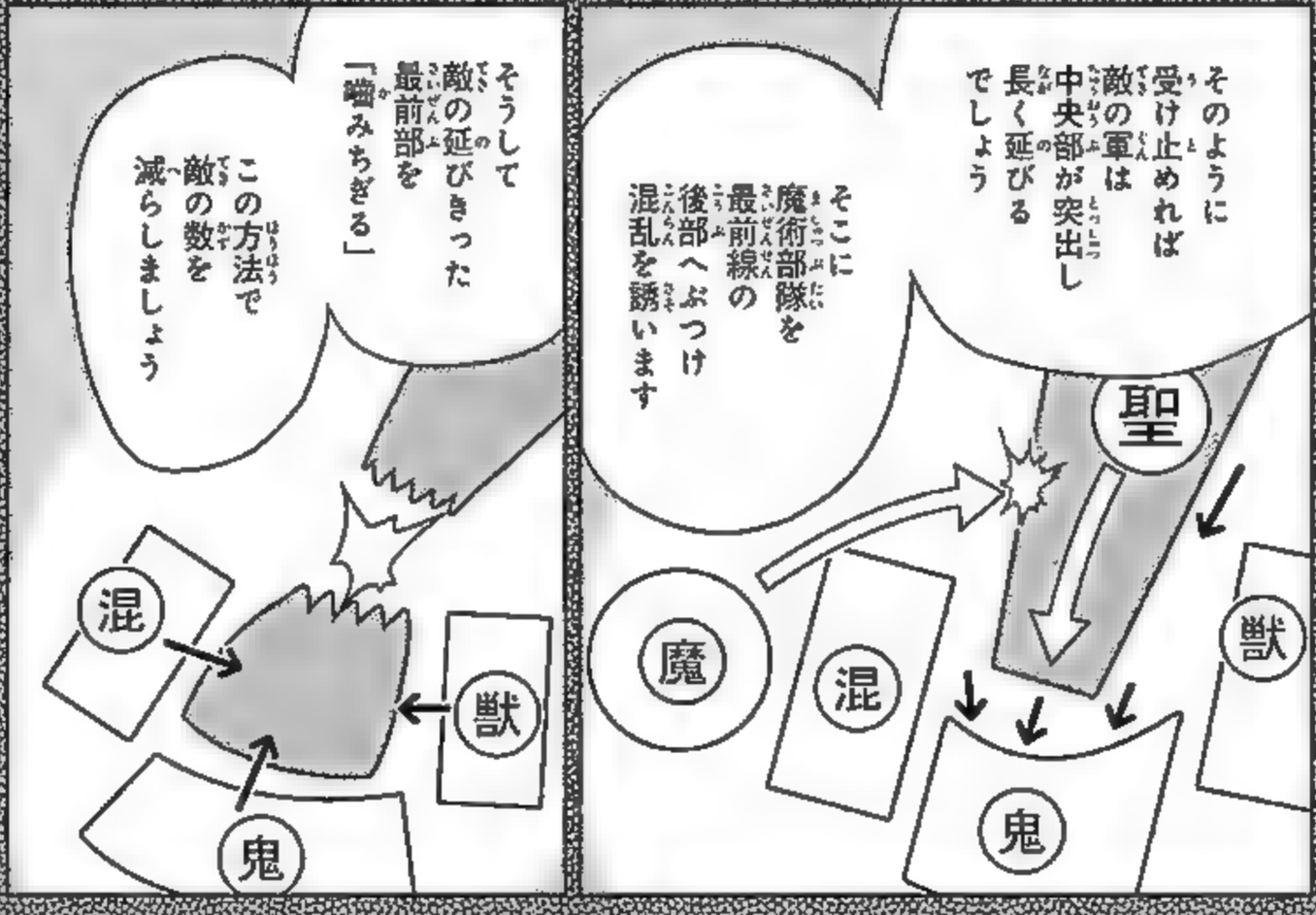
ええ

打ち合わせどおりに

人間界の者は魔術に対する防御が甘い

その弱点をつき混乱させて数を減らす

本隊は中央部を
鬼呼の軍
右翼を
獣人の一族
左翼を竜族
人間 巨人族などの
混成軍とします
都市から
一里ほどの
地点に布陣をし
敵の突進を
やわらかく
受け止める
聖
混
獣
鬼


そのように
受け止めれば
敵の軍は
中央部が突出し
長く延びる
でしょう
そこに
魔術部隊を
最前線の
後部へぶつけ
混乱を誘います
そうして
敵の延びきった
最前部を
「噛みちぎる」
この方法で
敵の数を
減らしましょう
聖
魔
混
獣
鬼

なんとか
なりそうですな
ええ
一万ほども
噛みちぎれば
人間の遠征軍も
肝が冷えるでしょう
しかし 事がそこまで
簡単にいくか
どうか…

鬼呼の
勇士たちよ！

敵の突進は
熾烈を極める
だろうが
それを
受け止める
必要がある
それができるのは
我ら鬼呼の軍
しかいない

諸君らの
武勇は
敵の猪口才な
火筒などに
左右されるもの
ではない！
鬼呼の
誇りをかけて
切り刻め！

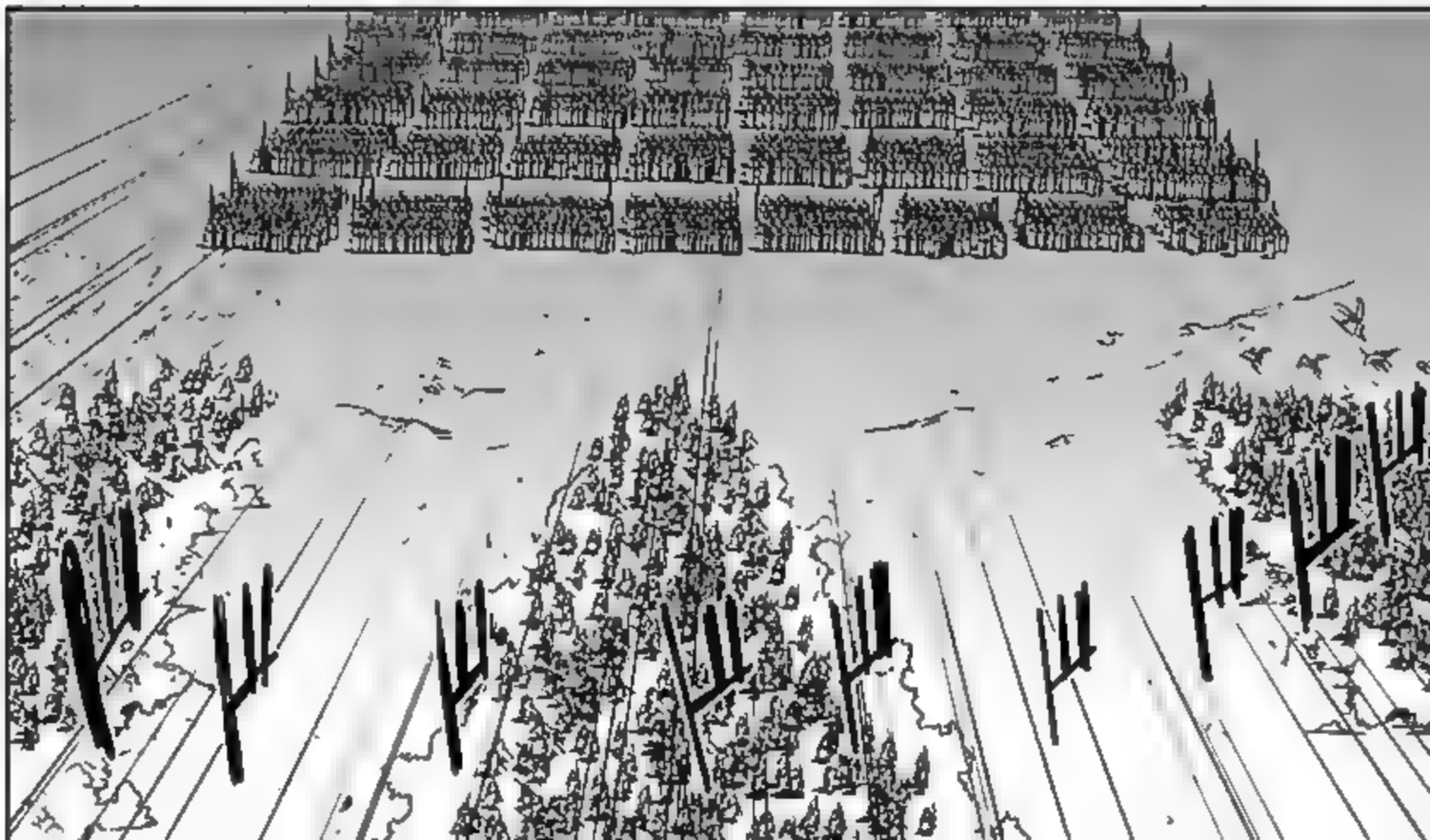
刀を取れ！
突撃！

ピュー
ピュー

こちらも行きます
接触よりも奥の地点を狙ってください
ま
かせろ…

突撃いー
突撃ー

我らも行くぞ
右翼より食らいつけ！



マスケット第一隊
撃てエ!!

……!
来る…

まだだ…
もっと引きつけろ

…今だ

なんだ…？
ゴホ
なんて音と煙だ…
おおおお

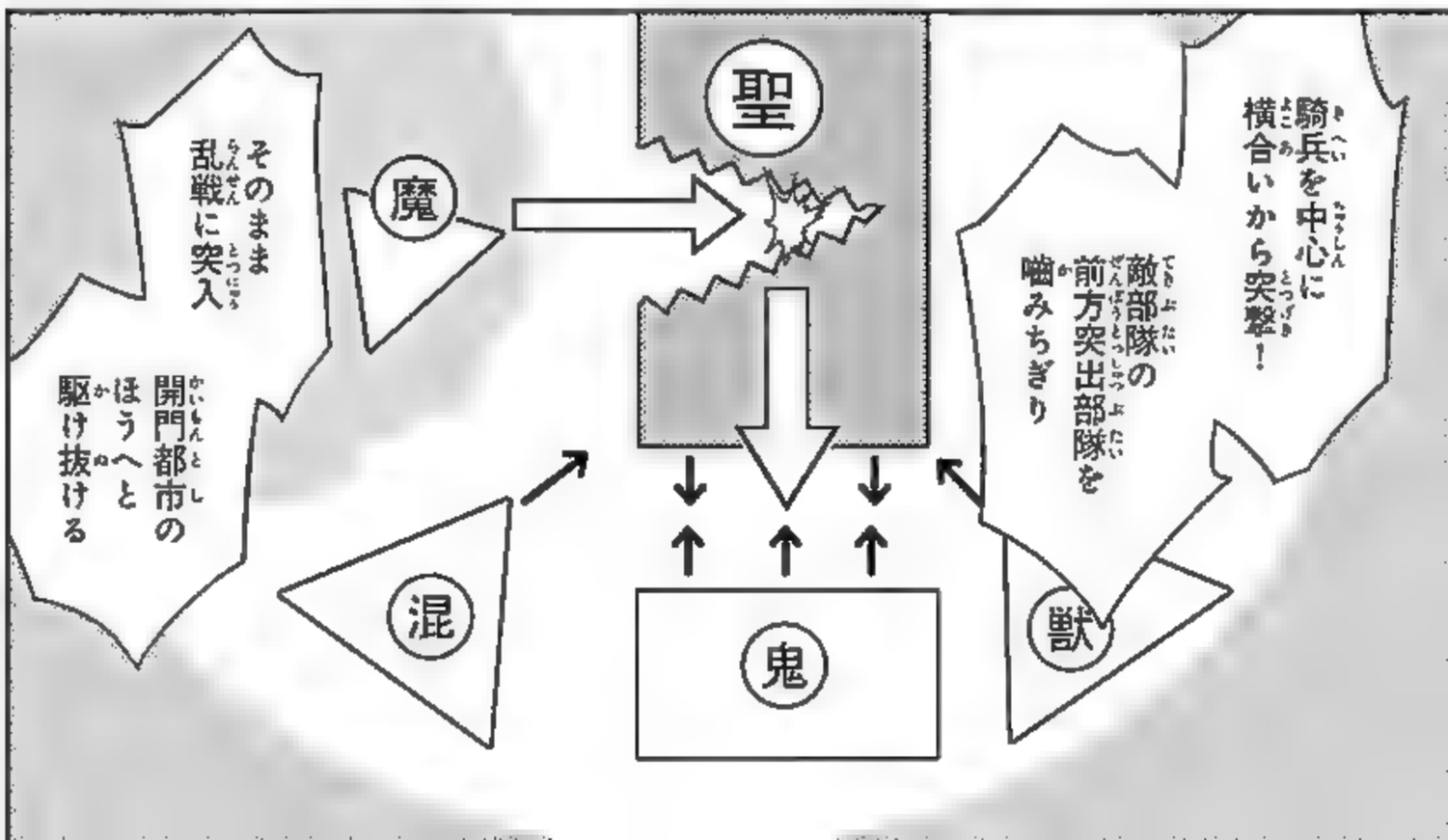
ひ…
怯むな！
切り込め！
鬼呼の武勇を見せろー
全軍突撃！
……!!
なんてことだ
これがマスケットの威力なのか…
だが
一度撃てば弾を込めるのに時間がかかるはず…
今の隙に突撃を…！
マスケット第二隊
前へ

精霊は欲し給う！
精霊は欲し給う！
はじまっていますね

…我ら人魔軍も行きますよ
は！
了解
了解
ゆくぞ
戦列を整えよ
遠征軍の先頭部分を横から切断するぞ
おお
魔術部隊術式展開！
……！
……！

ブワワ
フォォォォ

騎兵諸君！
諸君らの身体には幻影の術式がかけられている
敵の新型兵器マスケットは射撃武器だ
射撃武器である以上この幻影にて命中率は大幅に下がる


聖
魔
混
獣
鬼
騎兵を中心に横合いから突撃！
敵部隊の前方突出部隊を噛みちぎり
そのまま乱戦に突入
開門都市のほうへと駆け抜ける

ゆくぞ！
我らが
大地のために！

左翼から
敵の伏兵
分断を
目的とした
突撃かと
伏兵主力は
幻影魔法により
隠蔽された騎兵

灰青王様
分が悪いのかしら？
まさか
想定の範囲内ですよ
左右からの奇襲は織り込みずみ…

防御師団にはすでに射撃準備を命じてあります

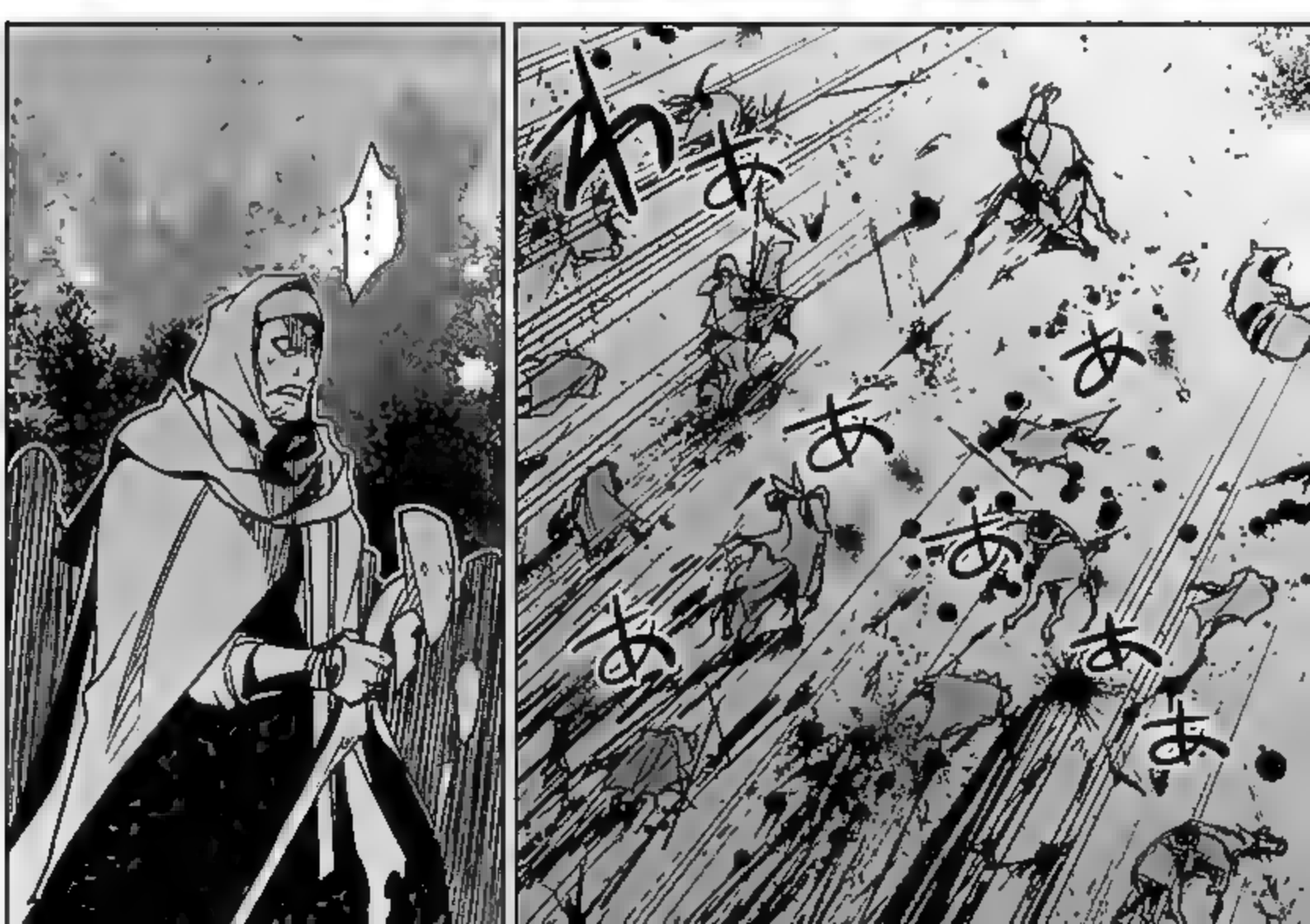
マスケットの威力と兵の人員の差を実感させてさしあげよう

目標は騎馬！
幻影のことで思い悩むな！
水平射撃を心がければよい！

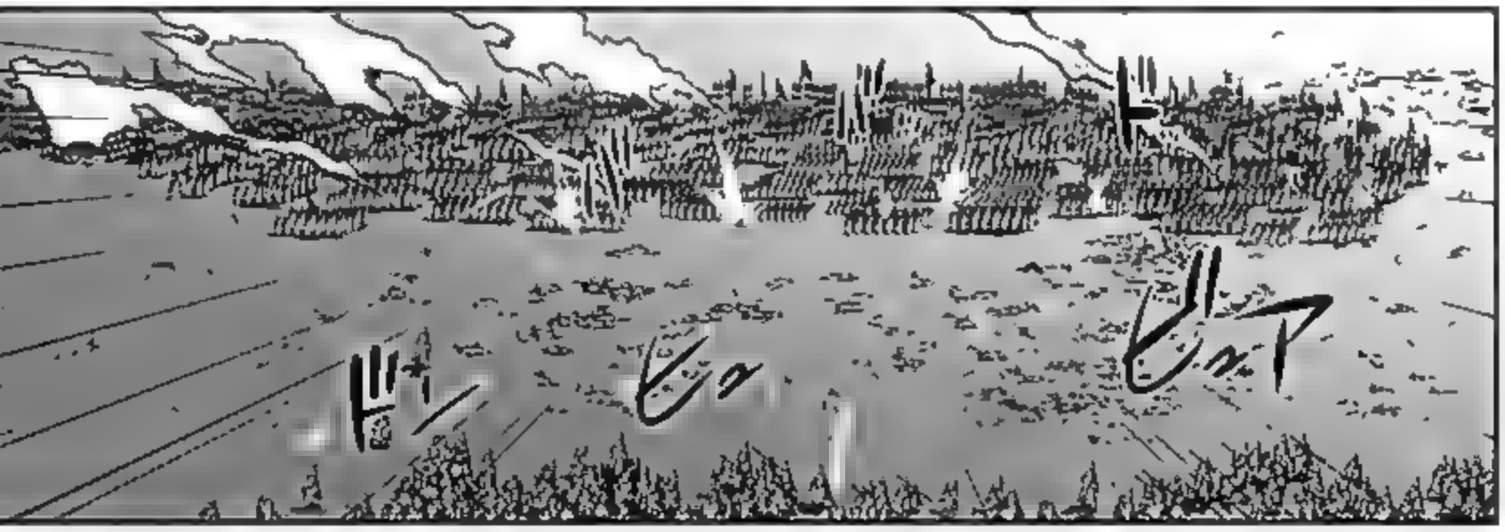
斉射！

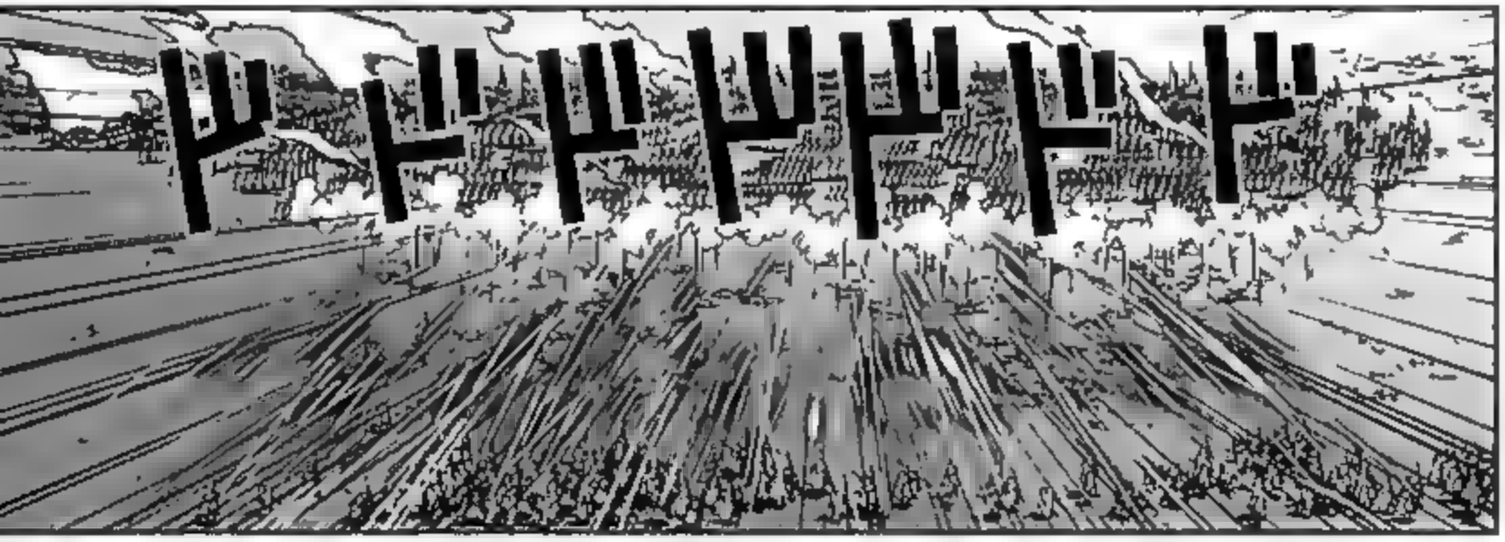
……

クソッ
どうどう
馬が…
暴れて
立て直して…


……
あ
あ
あ
あ
あ

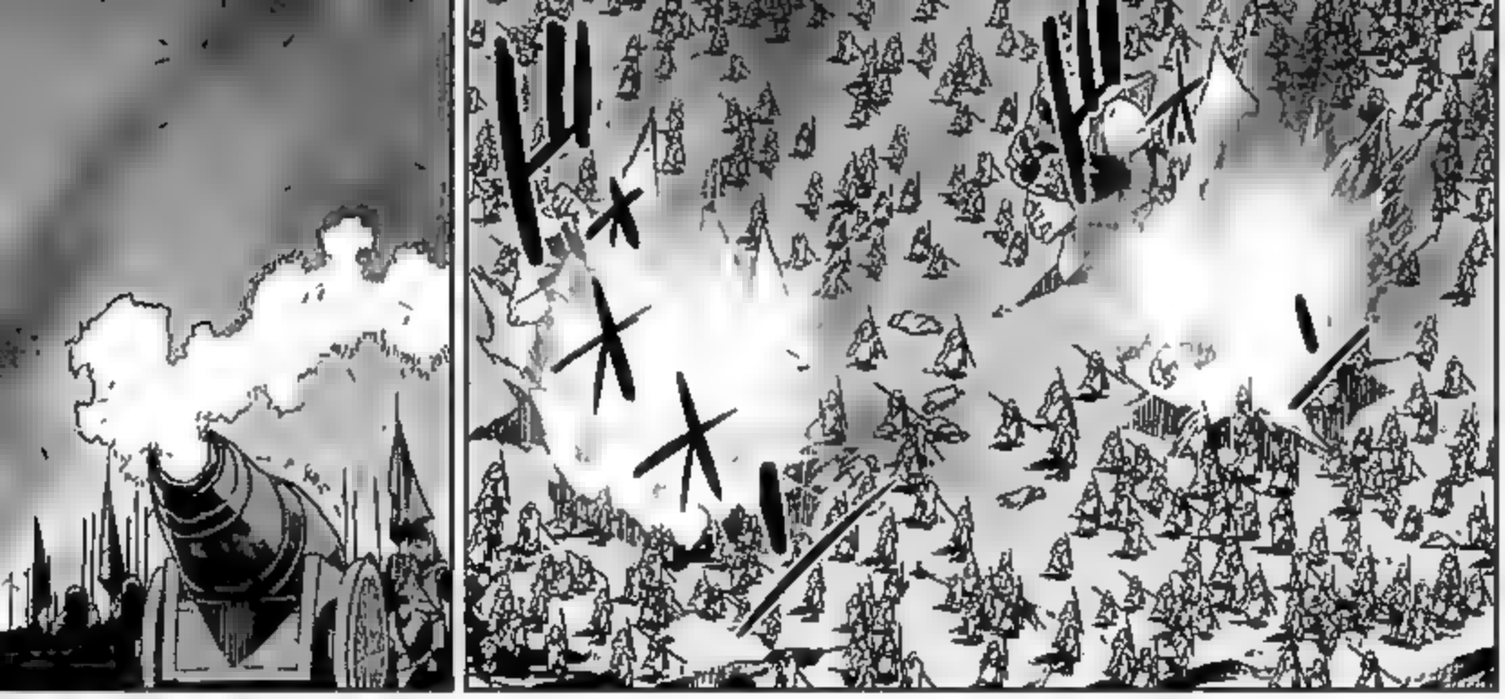
呪文を！
騎馬の掩護をするのだ！





隊長！
敵の攻撃が途切れません
ダメです！
数が違いすぎます！
く…

広域呪文を―
魔法陣を
組みなさい
!!
ゴゴゴ
中級以上の
術者は集まれ！
!?
ヒュルルル
ズズズ
ドン
パラ
パラ



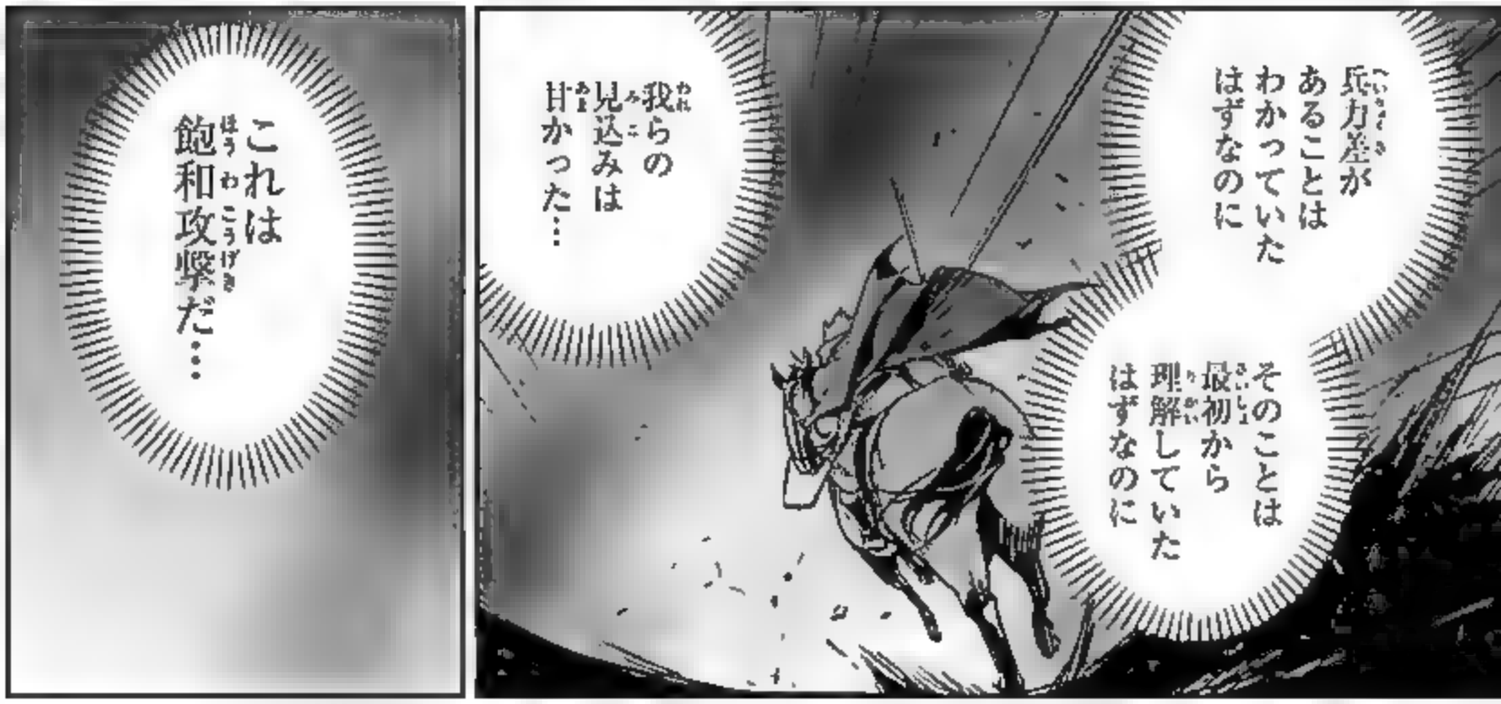
竜族！
巨人族
下がれ！
おお…
巨体を
的にされるぞ

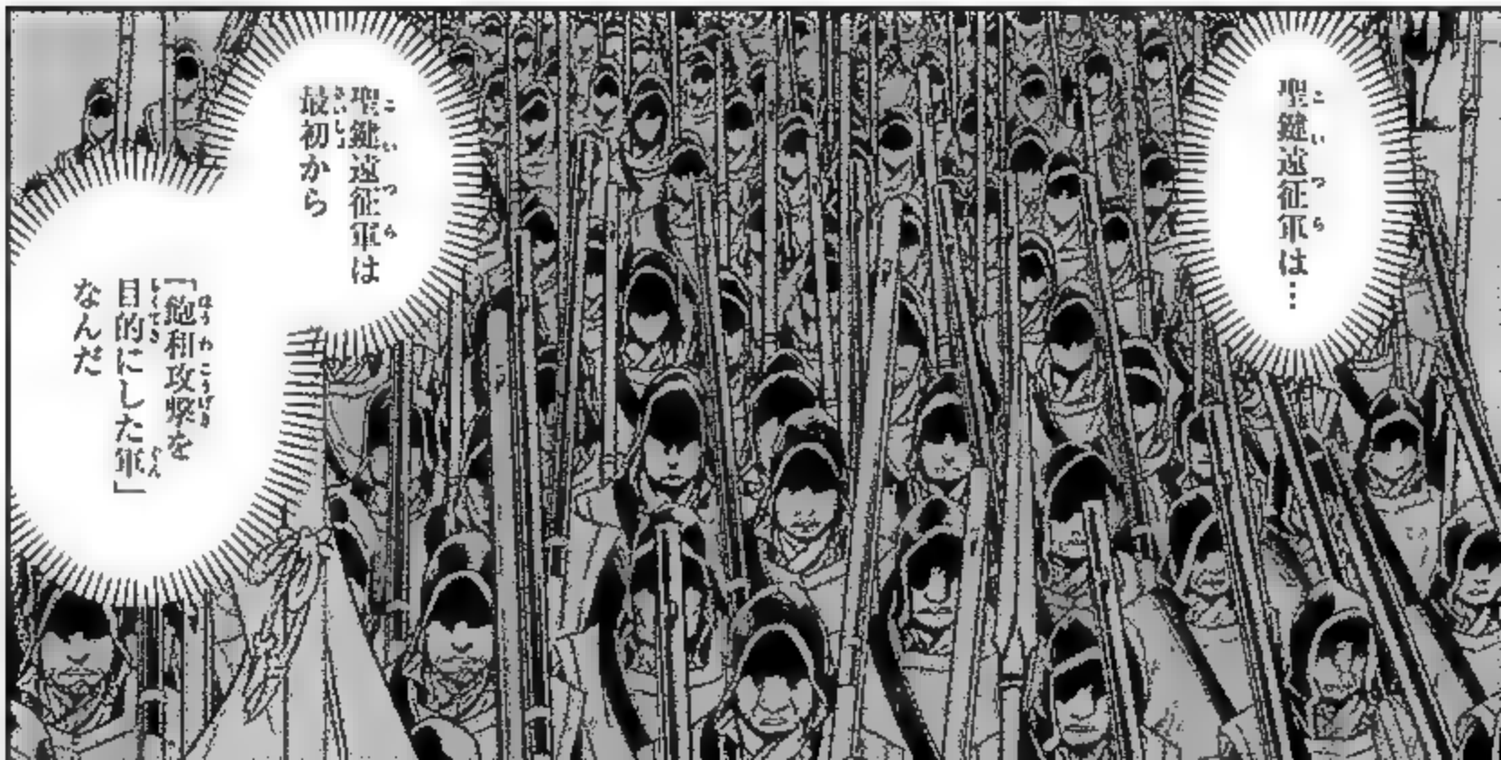
これは
まさか
魔王様より
聞いていた
大砲…!?
聖鍵遠征軍は
こんなものまで…

撤退だ
撤退支援に
入る！
重装歩兵
前へ！

傭兵隊は
私に続け！
鬼呼族の乱戦に
突撃する！

なんてことだ
こんなにも
こんなにも戦力差があるなんて！
奴らは最初からこちらが数を減らそうとすることを読んでいたんだ


兵力差があることはわかっていたはずなのに
そのことは最初から理解していたはずなのに
我らの見込みは甘かった…
これは飽和攻撃だ…


聖鍵遠征軍は…
聖鍵遠征軍は最初から【飽和攻撃を目的にした軍】なんだ

飽和攻撃…

防御力の限界以上の攻撃を一気に行うことによって

大打撃を与えること

マスケットの威力は脅威だが

使うのは急ごしらえの農奴兵

命中率が高いはずもない

こちらはそれを好機だと見たが

敵も命中率など期待してはいなかった

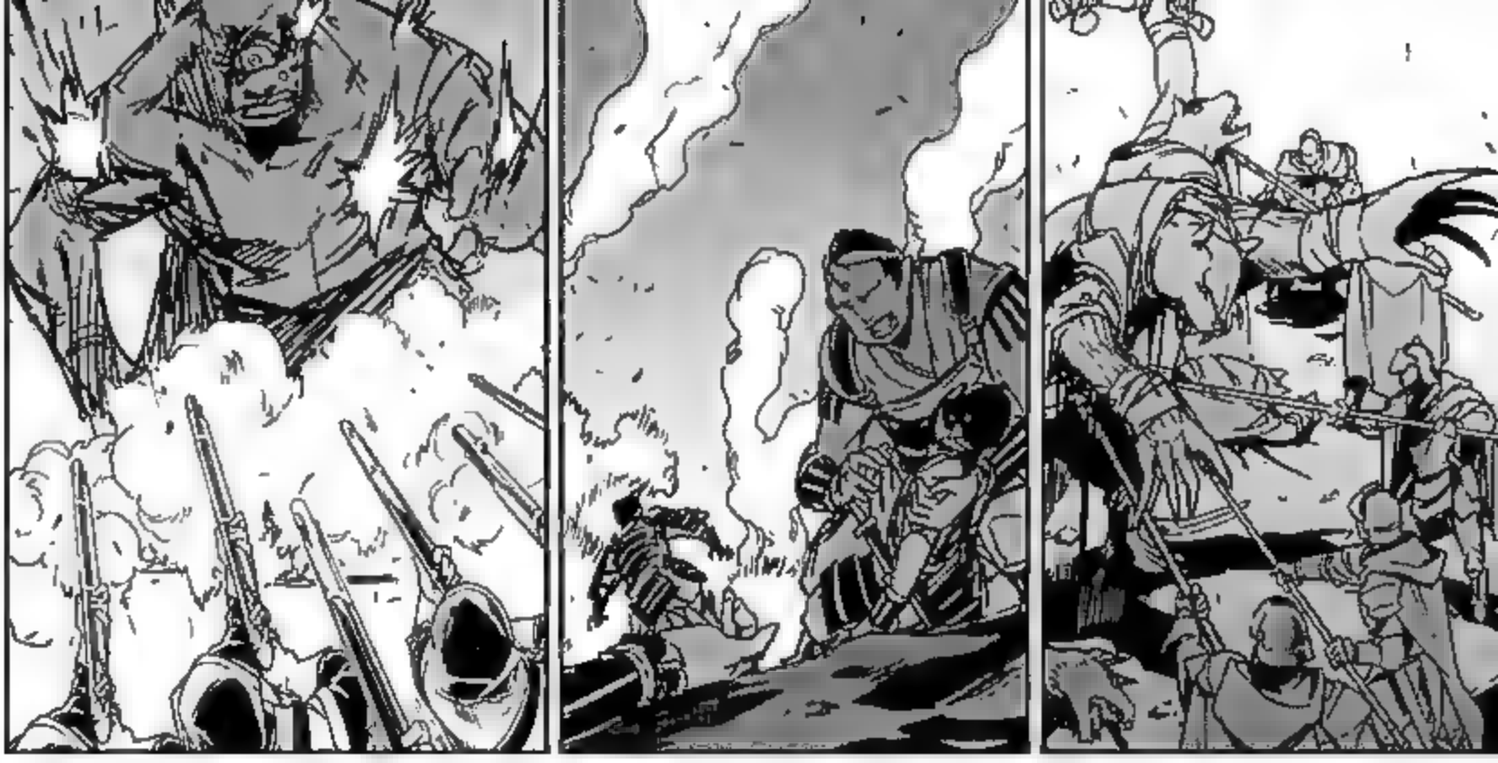
ただ敵の方に向けて撃つ

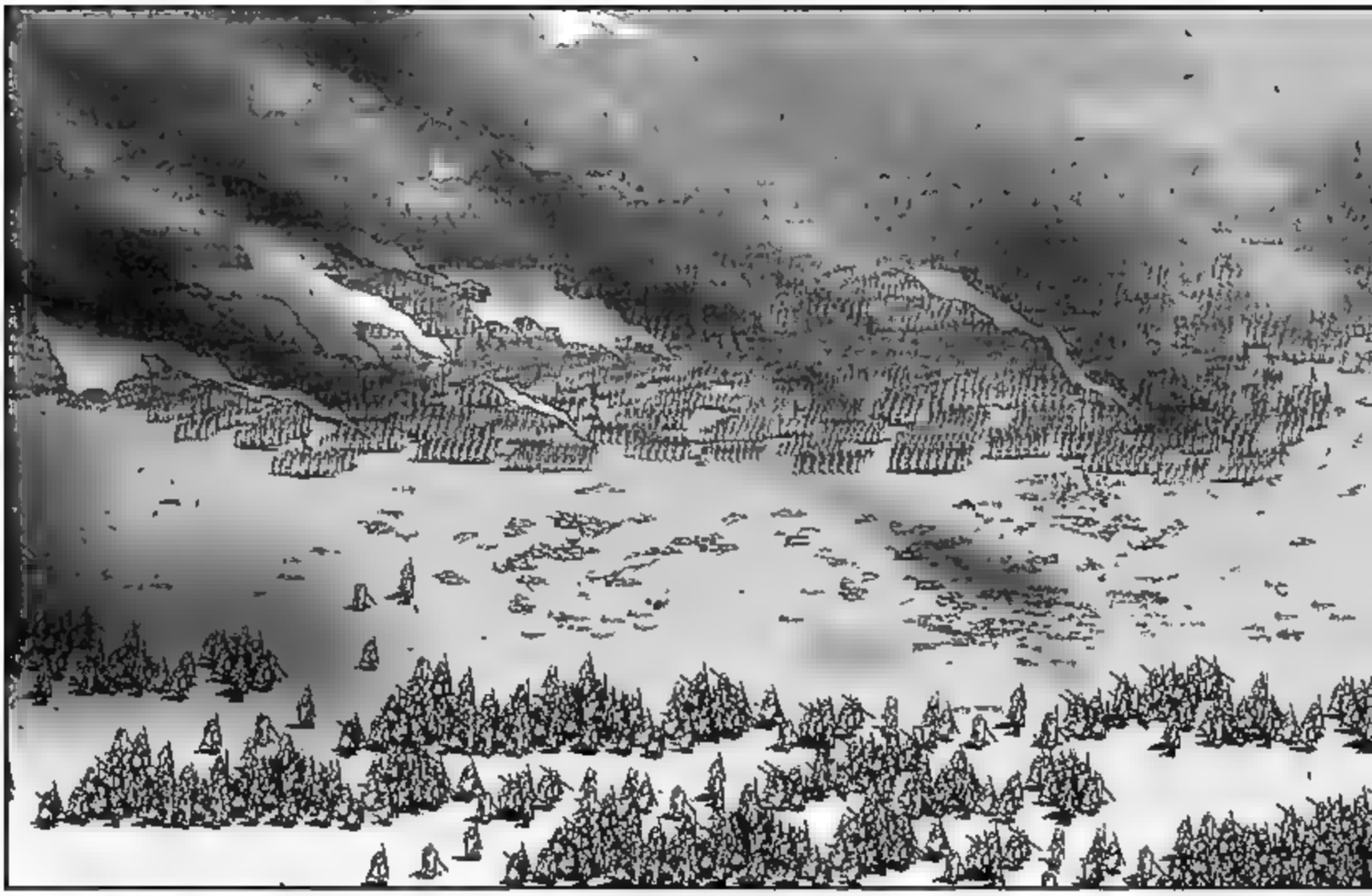
乱いなどつけてはいない

当然命中率は悪い

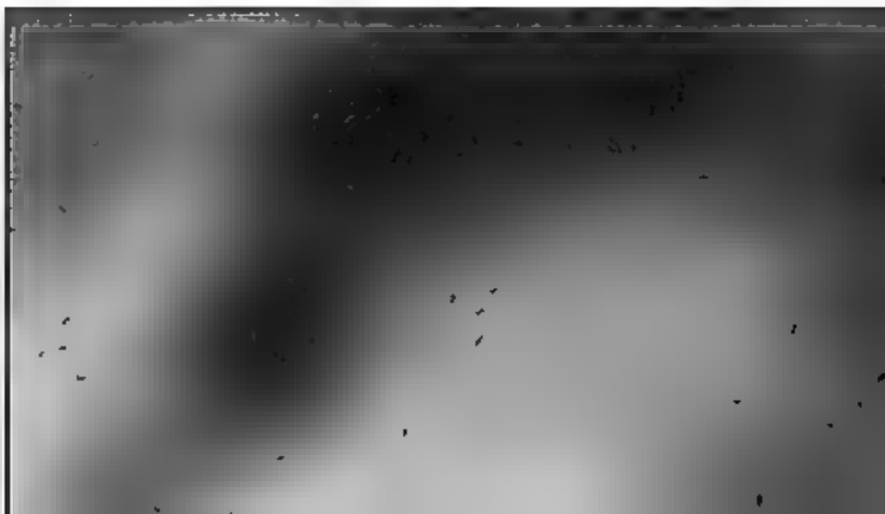
それだけのことなのに

あの数で行われると我々は全滅する





ゴボ



すさまじい銃火
どうなっていますの？
正気の司令官ならば
そろそろ撤退判断を下すでしょうね

逃しはしませんよ

では持ち越しに？

確認はできないが損耗率はもはや許容限界を遥かに超えている

前線は乱戦となって膠着しかけている
そんななかで撤退の報せが走れば動揺が走り
反転時に大きな隙が生まれる

魔族の軍が
撤退の報せに
動揺したとき
完全な
予備兵力として
温存しておいた
練度の高い精鋭
マスケット兵団
六〇〇〇を
投入する
…連中が背中を
見せた瞬間が
やつらの最期だ

撤退だ！

どうした
なぜ早く撤退をせぬ
急激に背中を見せれば
その隙を突かれます
こうして後退を行うしか
ありません

…今だ

な
なに!?
新手!?

この上
予備兵力
だと!?
な!?

助けるんだ
ひとりでも
多く!
撤退を
助けろ!
弱いところを
探して突撃を集中
させるんだ!

決まりましたわね
ええ
ドォン…
このまま
後退する敵に
あわせて前進すれば
開門都市の攻略も
なせるでしょう
ドドド

何だ!?
こ
後方から
新手の敵が
獣牙の兵が
後ろから…
だと?

我こそは
獣牙の勇士
銀虎！
我が前に立つものは
爪の餌食となるぞ
おおおお

敵にこだわるな！
混乱させればそれでいい！
今は撤退を助けて開門都市を目指せ！

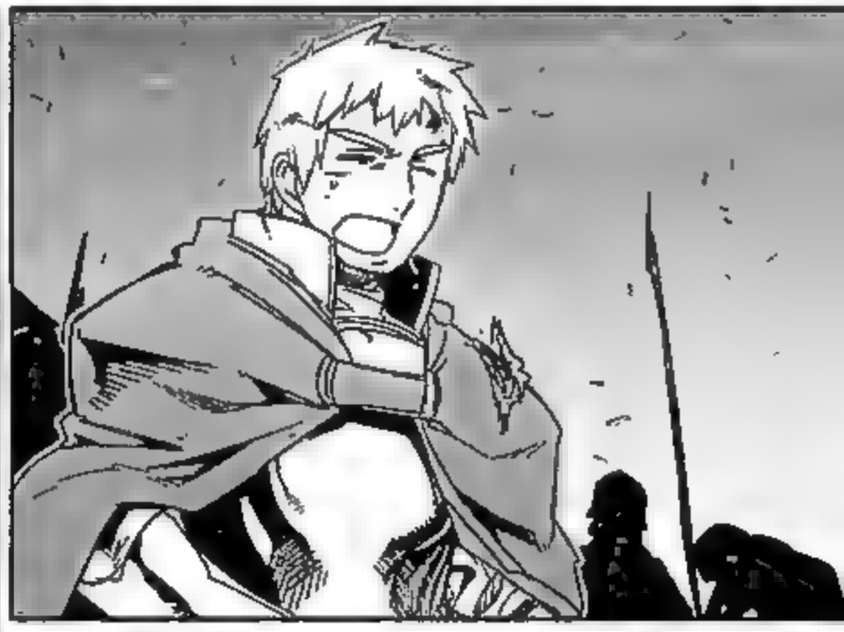
なんとか間に合った…か
だが聖王国のマスケット運用がここまでのものとは…

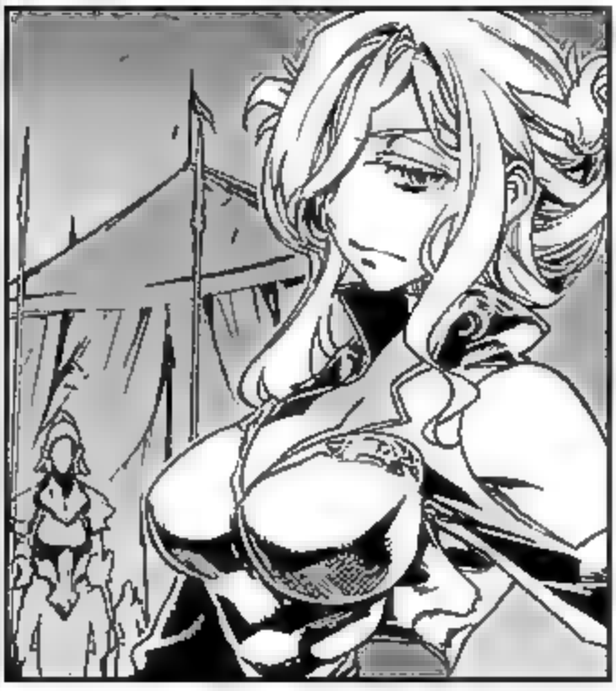
追撃の勢いが減った…？
魔王殿…

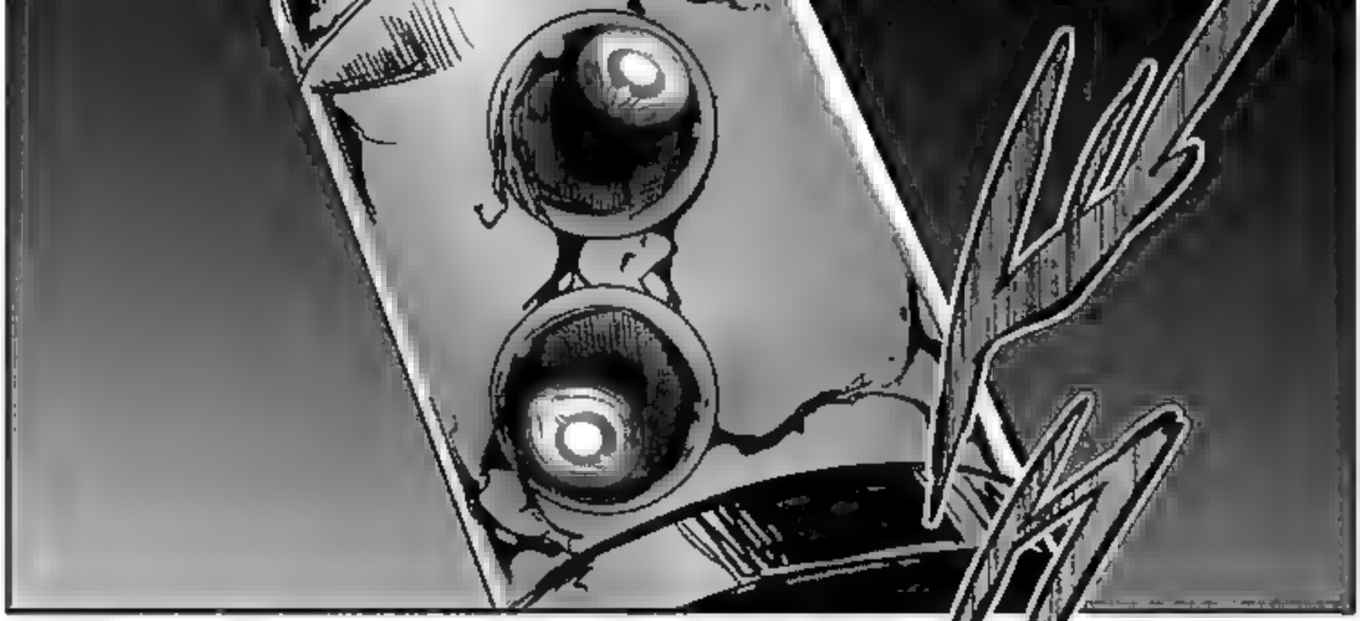
魔王様
大将
待ちかねましたよ
急げ
今のうちに
城壁をこえて
街に撤退する

この妙な形の
城壁…
果たして
マスケットに
通用するんだろうか

あの吠え声
このにおい
おお
銀虎公だー
銀虎公の
ご帰還だぁー







…来たか
…魔王

もうひとつの鍵よ…

第四十三回

大砲の歴史

攻城兵器として登場した大砲は
技術の発展とともに姿を変え、
現在においても各地の戦場で
使われ続けている。

砲撃は目視では避けられない。一番危険なのは、集団で同じ場所に留まっていることだ。

攻城用の兵器として登場した大砲

戦争において、敵の重要拠点を奪取するには相応の時間と兵力が必要になる。火砲が発達する近世以前はなおさらで、堀や高い城壁で守られた拠点を攻略するために、古くからさまざまな攻城兵器が考案されてきた。なかでも離れた場所から敵を攻撃する投石器は、城壁や塔を破壊するうえでも効果的だった。そして、その発展型ともいえる兵器が大砲だ。

大砲は、13世紀半ばに中国で発明された木製のものが最初のようだ。14世紀初頭には青銅製の大砲がつくられたが、中国では戦乱が収まったために大きな発展は見られなかった。やがて、この技術は西アジアを経てヨーロッパに伝わり、15世紀初頭には西欧でも青銅製の大砲が使われるようになっている。

当初の大砲が青銅でつくられていたのは、砲撃に耐えうる大砲をつくるだけの製鉄技術がなかったためだ。また、当初の大砲は攻城兵器としての運用が主だったこともあり、非常に重く持ち運びが不便なうえ、射撃間隔も長かったという。

打ち出す砲弾については、当初は金属ではなく石が使われていた。しかし、13世紀頃には石に鉛を被せた砲弾が出現。15世紀になって球状の鉄の砲弾が登場し、以後はこれが一般的になった。

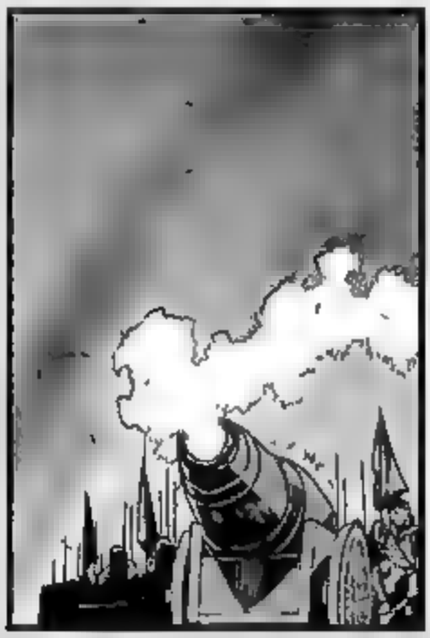
14世紀末には、火薬を仕込んで導火線を取り付けた砲弾も開発されていた。これは、導火線に火をつけて打ち出すことで、着弾前後に爆発する仕組みだ。ただ、爆発までの時間調整が難しいうえに砲身内で破裂する事故も多く、長らく主流にはならなかった。

とはいえ、大砲の出現は拠点の攻防戦の様相を大きく変化させ、拠点の防御構造にも大きな影響を与えている。

産業革命が起きたのちは、砲撃の反動を吸収する駐待機や砲身内に溝を彫って弾道を安定させるライフリングが登場。後装式の実用化もあり、大砲の性能は飛躍的に高まっていく。

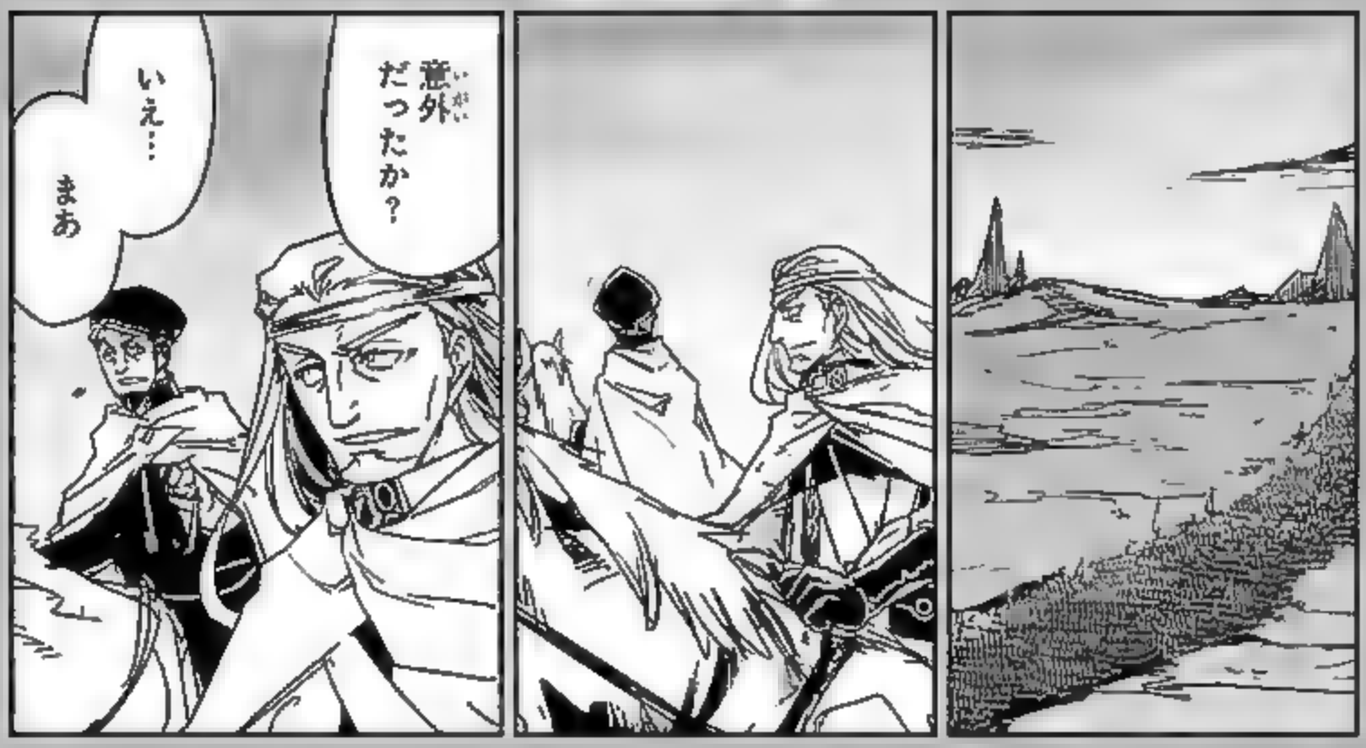
のちに、砲弾が破裂する榴弾も実用化の域に達し、第一次世界大戦では死傷者の7割が大砲によるものと言われるほどの兵器となる。

以後、大砲は対航空機用、艦載用など目的に合わせて開発されるようになり、ついには大砲が自走する戦車が登場するまでになった。



破裂しないタイプの砲弾でも、敵が密集している場合はかなりの効果がある。

忸怩たる


意外だったか？
いえ…
まあ

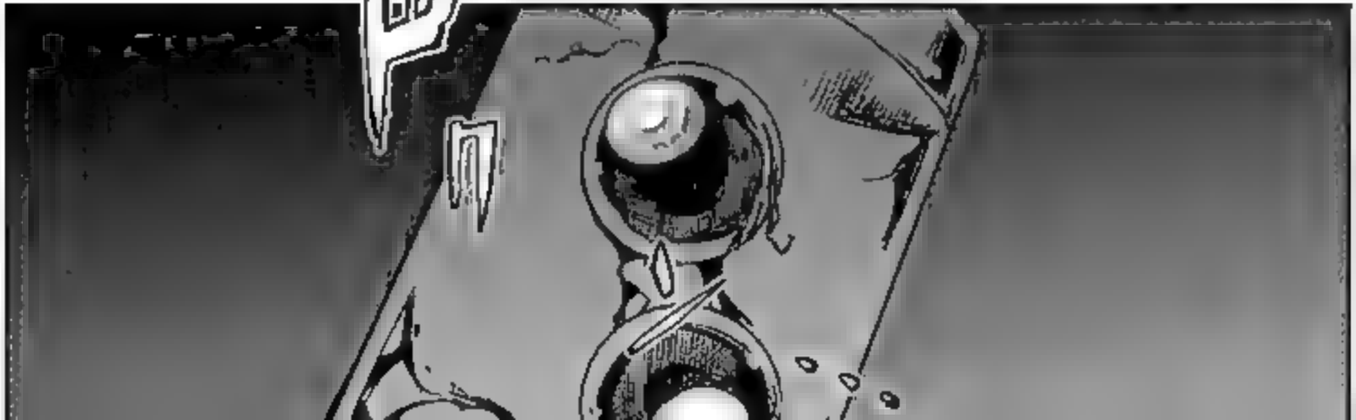
勇者は魔族と戦える方に行くものかと…

開門都市と遠征軍の戦いを監視し報告してくれ
は
おまかせを

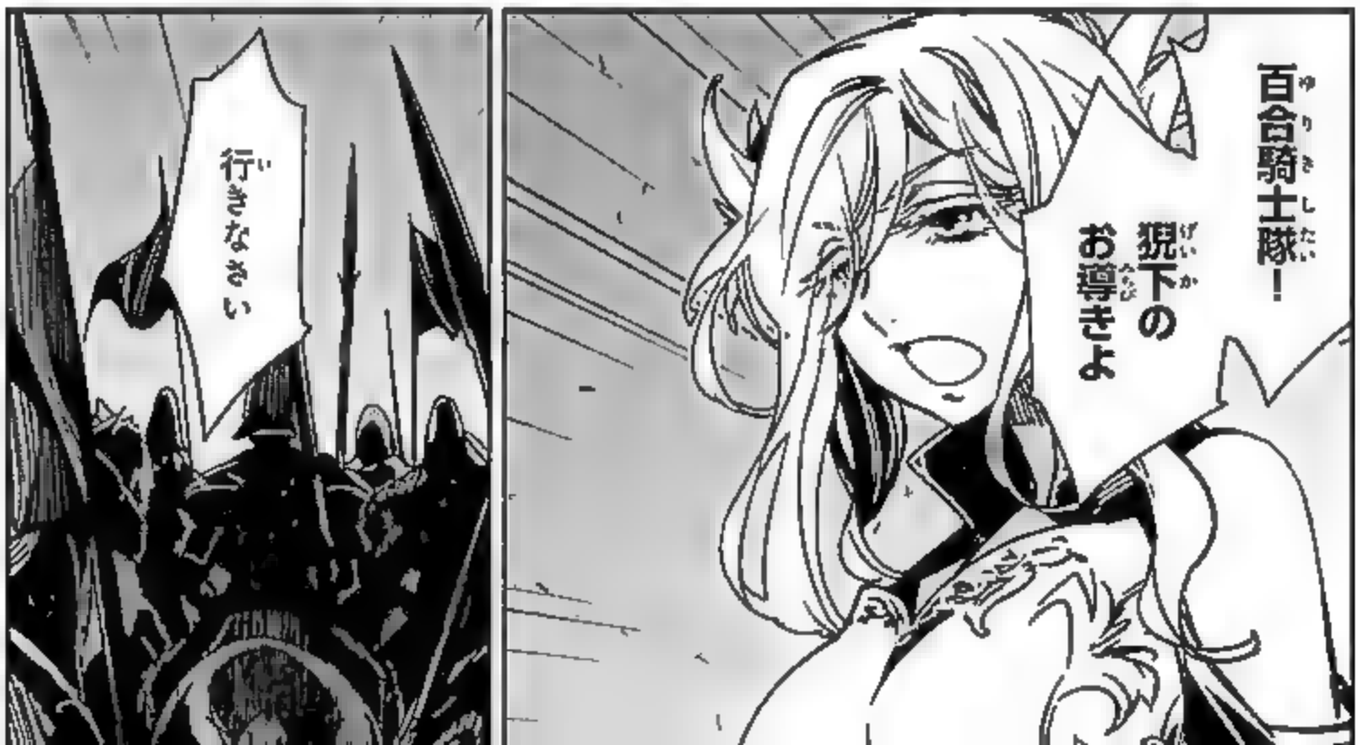
魔王が…
来た

まおゆう
魔王勇者
第四十六話
戦場の
中央部…
乱戦部を
抜けようと
しているな

なぜ
そのようなことを
いながらにして？
これも
精霊の啓示…



百合騎士隊よ
騎馬マスケット部隊にて魔王を包囲するのだ
はっ


百合騎士隊！
猊下のお導きよ
行きなさい

第四十六話 Archenemy and Hero 46th chapter

還らぬ者の名にかけて

なぜ人間が
魔族につく！
魔族の狗め

なぜ
殴りかかっても
こない相手に
殴りかかる！
魔族は光の敵
諸悪の根源
光の精霊の
信徒として
魔族は滅ぼす

臭えんだよ
その考えが
キサマ
光の教えを
愚弄するか
ああ
するね！
クソの役にも
たたねえ

人間界の
裏切り者がぁ!!
教え込まれた
とおりに踊る
人形よりマシだ!

急げ!
右翼に隙を
見せるな!

魔王様
ここは危険です
早く移動を
しかし…

行くぞ
魔王殿
…これは
ただの戦闘

魔王殿の出番は
他にあるはずだ

……

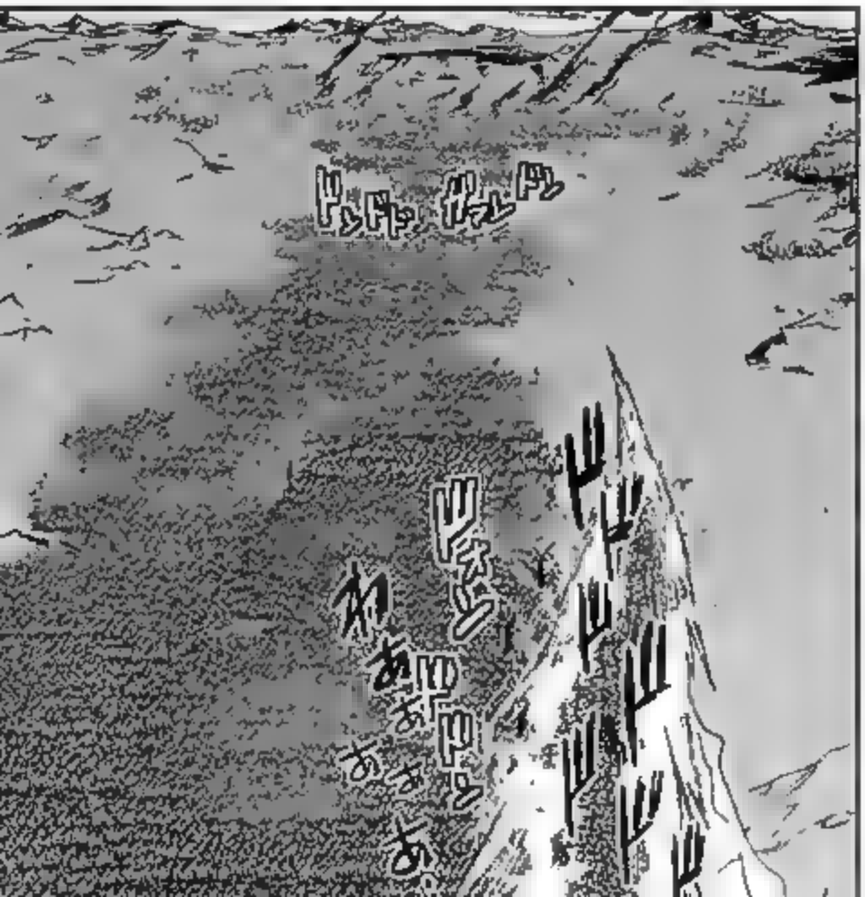
魔王だ！
ゴォォォ
く…
ポ…

この近くに魔王がいるはず
魔王を捜せ！

魔王を見つけ出しマスケットを喰らわせるのだ！
魔界の背教者暗黒の権化に死の鉄槌を！

どうやら
魔王殿が
戦場にいると
知れたらしいな
早く行くぞ
わかった

都市へと
退却する！
は！



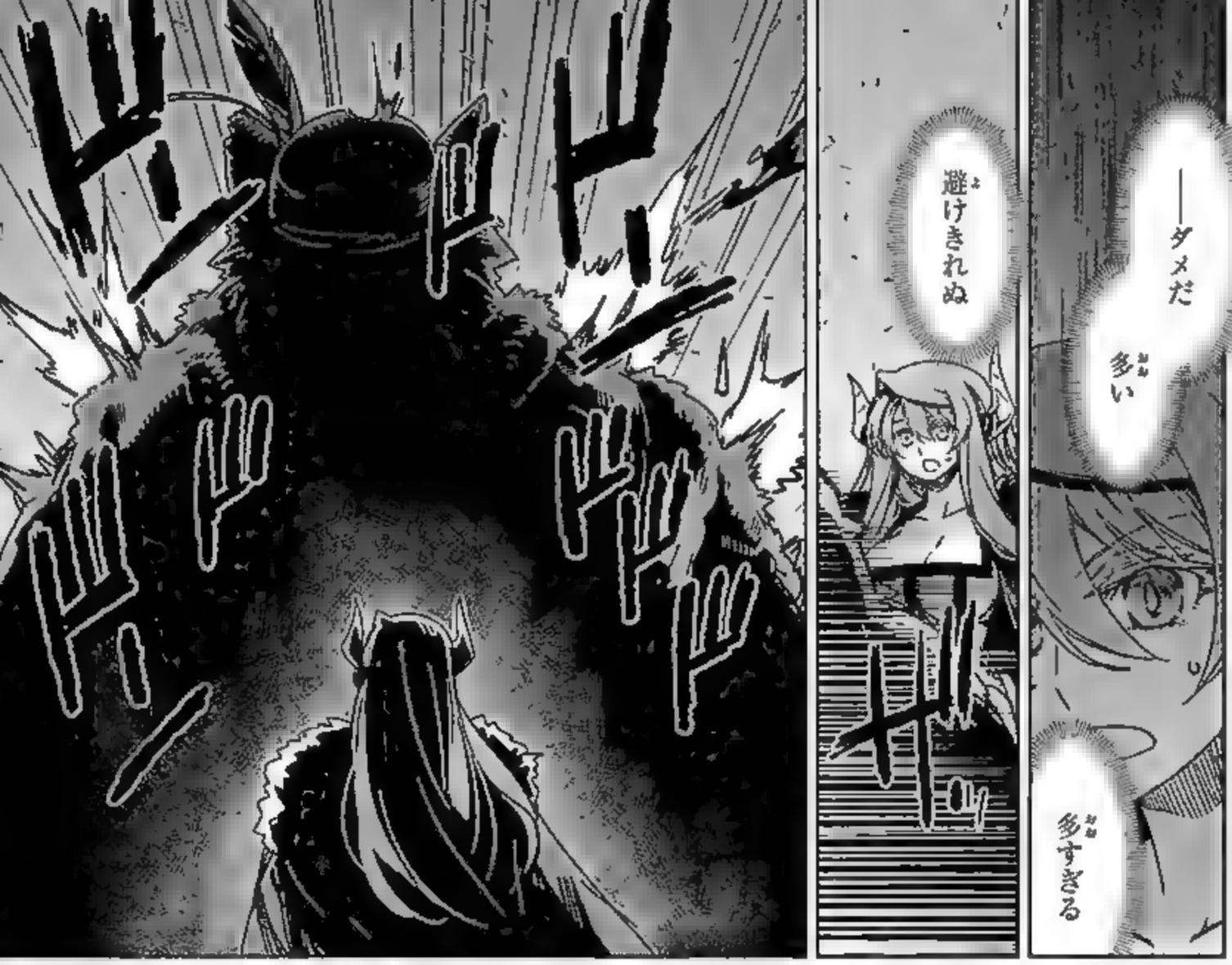
マスケットの威力がこれほどとは…
火気の配置と集中
そして乱戦を意にも介さぬ冷徹に満ちた集中力と無慈悲さ
このような突撃のない用兵を行う者が
聖征遠征軍に存在するとは…
これも私の罪なのか…
それにしてもなんという数だ
二〇万？
三〇万？
そんな数字を聞いてもわかりはしない
この布陣を見るまでは私にもわからなかった

これだけの数の
マスケットと
大軍勢は
魔族を
ひとり残らず
殺すことも可能
かもしれない
……！
何をバカな
そのような
非現実的な妄想など
あるものか

…だが
この悪魔的な
破壊力
殲滅力
あふれかえる
血の軍はどうだ

戦が始まってから
まだ半日もたって
いないはずなのに
大地は
おびただしい
血を吸って
黒くぬめったような
異質な光景に
なり果てている…
これが火葉の
作り出す地獄
なのだとすれば…
私は
私は

魔王殿！
伏せろ！
クス
クス
クス
闇の浮かれ女よ
魔王よ
その生命
ここで
散らしなさい!!


多すぎる
——ダメだ
多い
避けきれぬ

くふ
ふは
はは
はは
はは
はは
血が
これでは
銀虎公！

はははは
バケモノめ…
さあ 魔王殿
急げ！
急いで都市に向かってくれ
はははは
そんな…
ダメだ！
逝くな！
銀虎公
許さんぞ
私は！
ギュ
ち
往生際の悪いことを
第二斉射用意！
ニャキ
させるかぁ!!
ドドド

貴様らのような雑兵にやられる我ではないわぁ！
ぎ
銀虎公

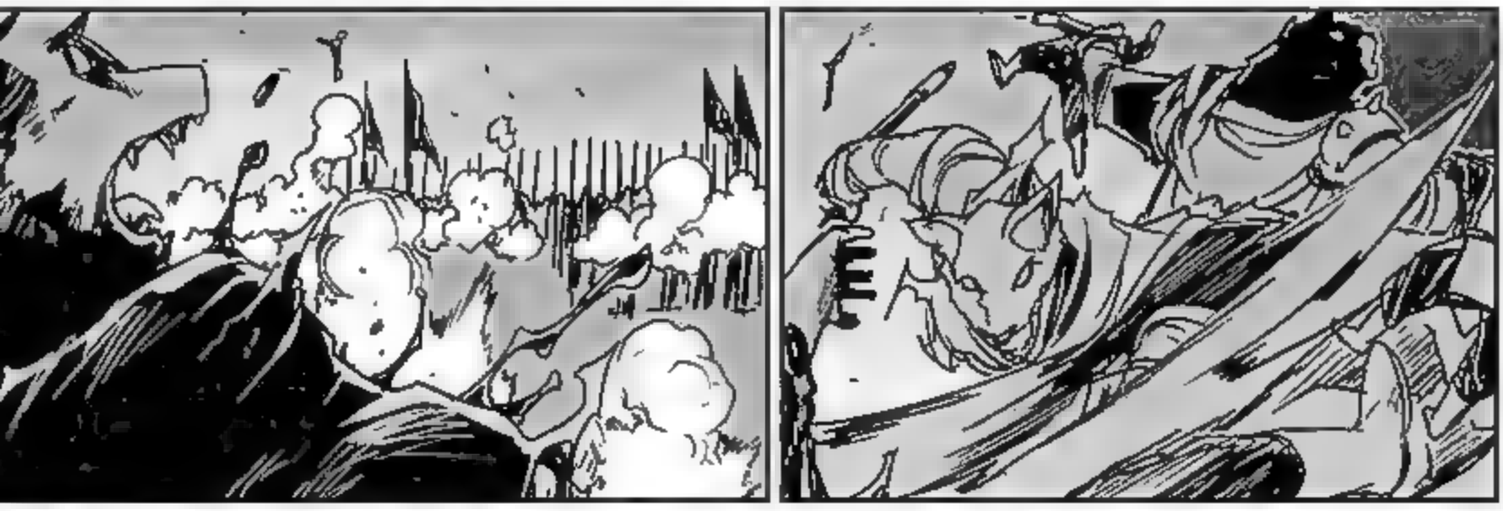
死ねえ！
化け物め！
倒れろぉ！
バズ
バズ
バズ

ぎ
銀虎公——
ダメだ！
魔王殿！
行くんだ！

公を
おひとりに
するな！

銀虎公
我らも共に

獣牙の勇士よ！
突撃いいい！



銀虎公ー！！
銀虎公ー！！
行かせない

戦場こそ
我ら獣牙の
故郷！
楽しい
戦だったぞ
魔王殿
ははは
はは
ダメだ！
ダメだあ！

我ら獣牙は
戦の民
しかし
粗にして野でも
卑にはあらず
魔王殿に
誓った忠誠は
その報恩は
未だ尽きては
いないぞ！
ははははは！

我は
三度の約束のうち
二度は果たしたが
最期の一度を
お返しする前に
果てるようだ
ドオオオ
ドドドン
ドドン

人間の勇士よ！
将軍よ
後のことを
魔王殿を…
頼む

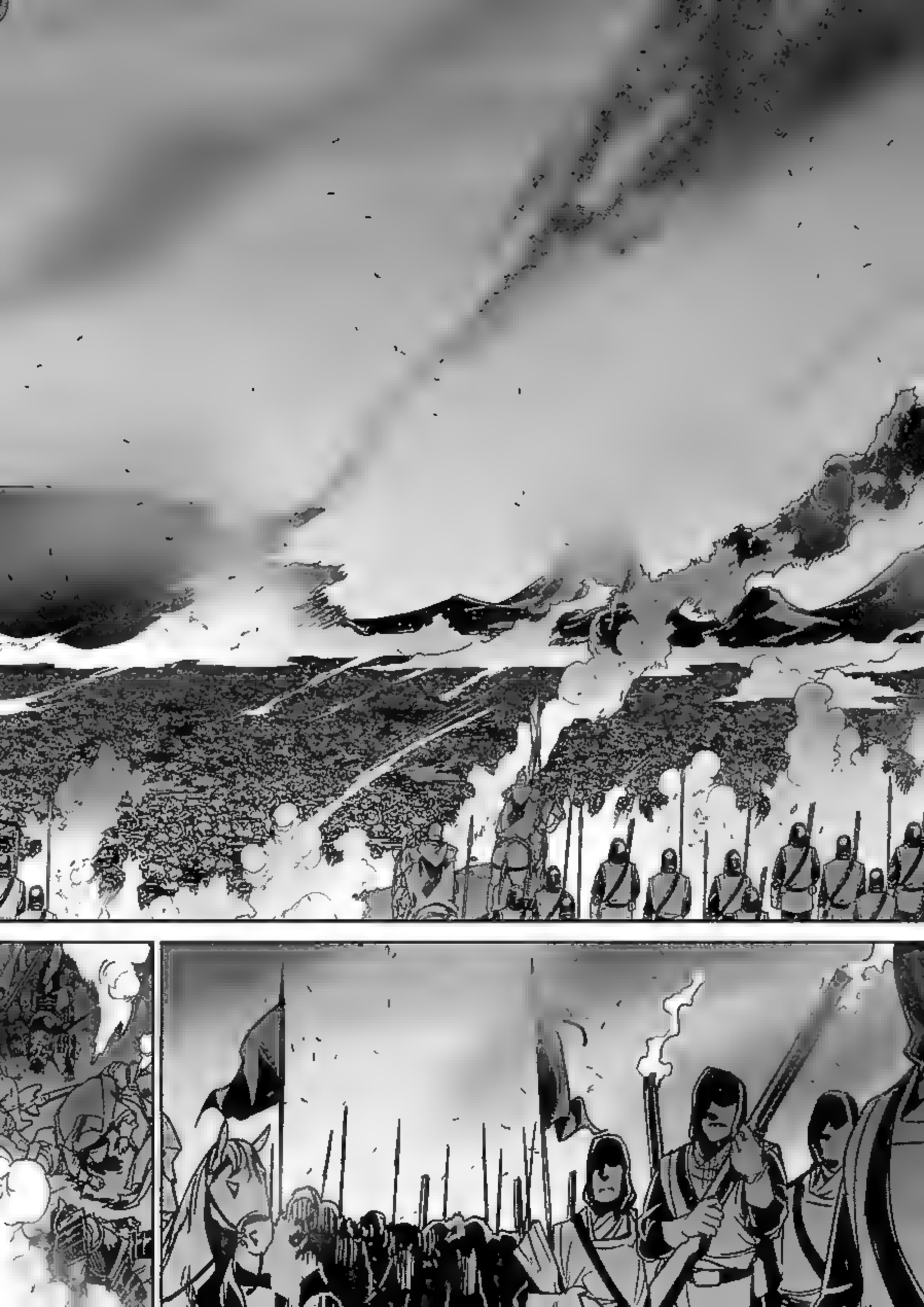
…まかされた
銀虎公ー！！

逃(のが)してはなりません
魔王(まおう)を…
ヒッ
ドォン
ドォン
ドォン

…
もう
死んでいる…のか

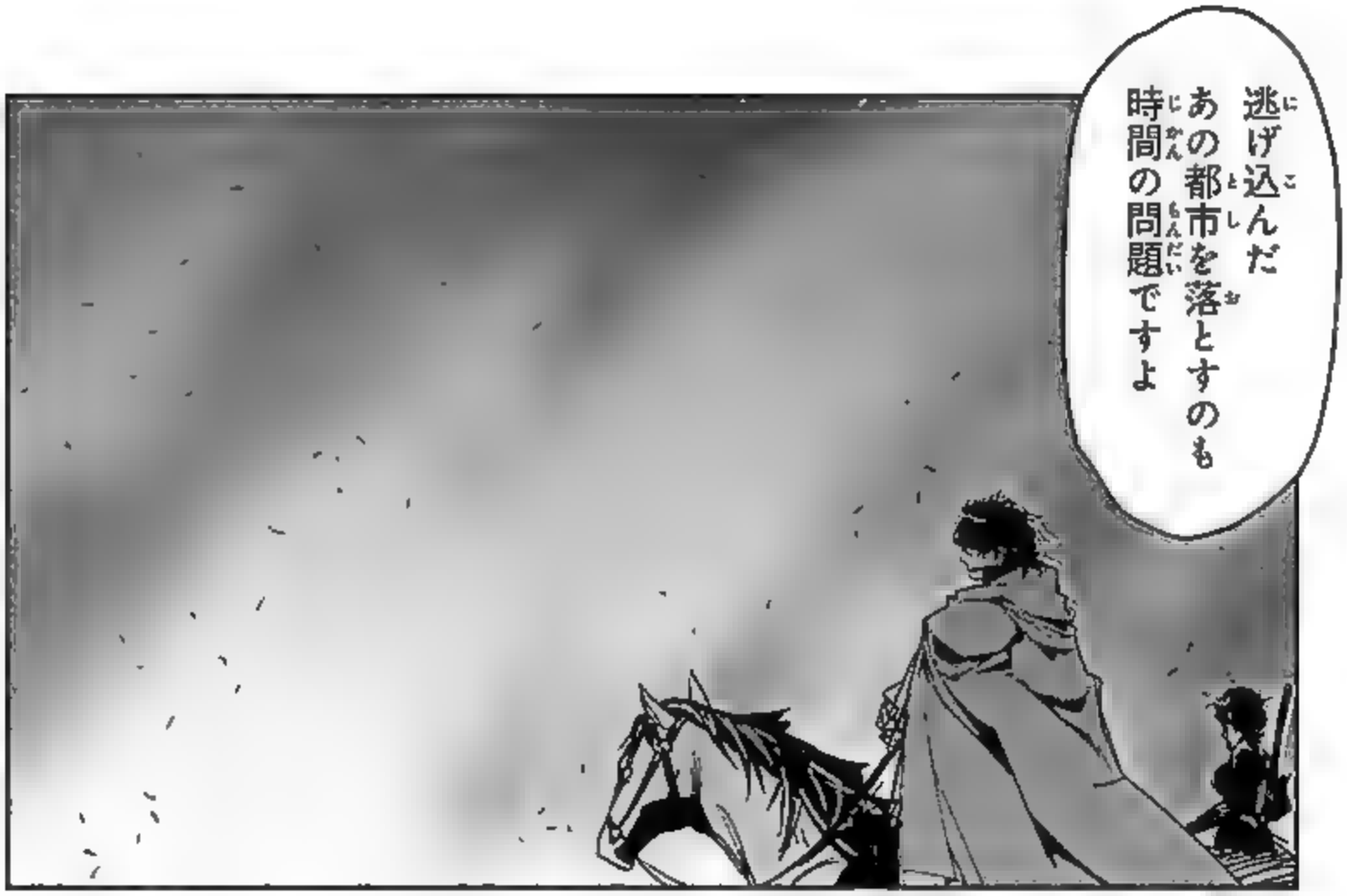
銀虎公…
我らも行くぞ
おう！

灰青王!!
戦列を
乱されては
困りますな
おかげで
敵の撤退を
許してしまった
とはいえ



緒戦は
大勝利といって
よいでしょう

緒戦は
大勝利といって
よいでしょう


逃げ込んだ
あの都市を落とすのも
時間の問題ですよ

王弟軍
勇者の天幕

昨晩夕刻に
開門都市軍は
都市防壁に撤収
その被害は甚大で
三万に迫る とのこと
三万…!?
半壊…か

みんな…無事でいてくれ…
なんで俺はそこにいられないんだよ
俺は勇者なんだぞ
勇者なのに人も救えないで何が勇者だよ
転移も禁止
上級呪文以上は全部禁止
勇者剣技も禁止で移動速度は馬の二倍まで

…って
どんな罰ゲームだよ
女魔法使い
引き続き監視を頼む
御身がために

助けたいんだ
大事なんだ
みんなが
人間も
魔族も

なんで俺は
肝心なことは
できないんだ
いつも
いつだって――

魔王…
無事で
いてくれ

きっと
もう少しだ
もう少しで
女魔法使いの
準備が終わる
それまで
耐えてくれ

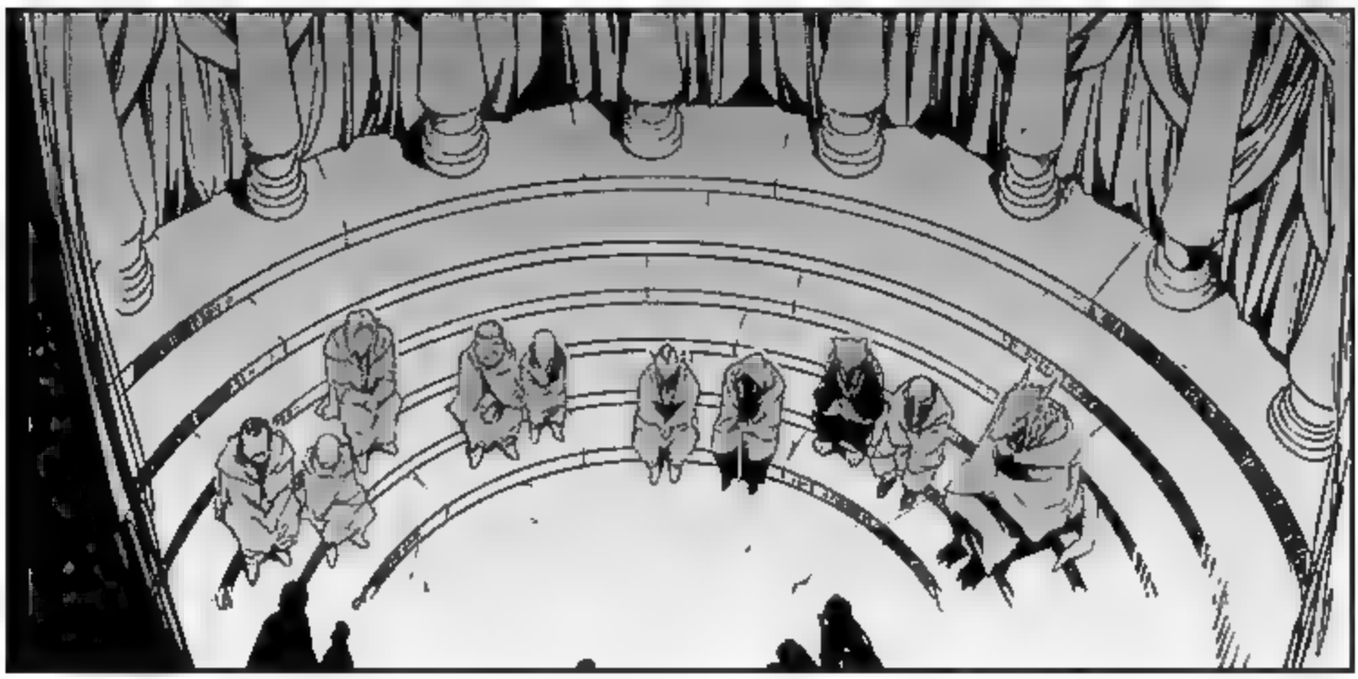
開門都市
わあっ
魔王様！
魔王さまぁ！

魔王様の
ご帰還だ！
おお…
わあ
よくぞ無事に
ご帰還して
くださった！

魔王殿
よくご無事で
わい
わい
ざわ
ざわ
——心配をかけたな
準備をしてくれ
軍議だ
大将
まったく
ボロっちく
なっちまって
パ
お互いにな
魔王殿
戦の最中だ
気は抜けぬ…が
お互い
無事で
よかった
はい

――重い荷を背負っている
それがわかる
…はい

還らぬ者の名にかけて
この命の一片に至るまでおろそかにもムダにもできぬ



私がいない間
大きな心配と
多大な負担を
かけた
私の見込みの
甘さから
このような
事態を招いた
ことを謝罪する

いえ
これは…
人間どものせいです
その責を問うのは
生き延びてからにしよう

紋様の長よ
傷はどうだ？
今少し時間をもらえれば
戦場に立ってご覧に入れる

無理はしてほしくない
私は二人目の銀虎公を見たくはないのだ
……

俺は
この身命を
魔王殿の
盾としよう
――それは

砦将
この都市の
防衛総司令
および迎撃を
任せる
その命
承った

……

銀虎公の
推薦だ
魔王殿にも
文句は
言わせねぇよ

自治委員会の
方々よ
姫巫女に力を貸し
その手足となって
動いてほしい
承りました

鬼呼の
姫巫女よ
都市内部の統制と
内務のすべてを
掌握せよ
は

この都市を
落とされる
わけにはいかない
それは我ら
魔族のため
でもあるし
ある意味では
人間族のため
でもある

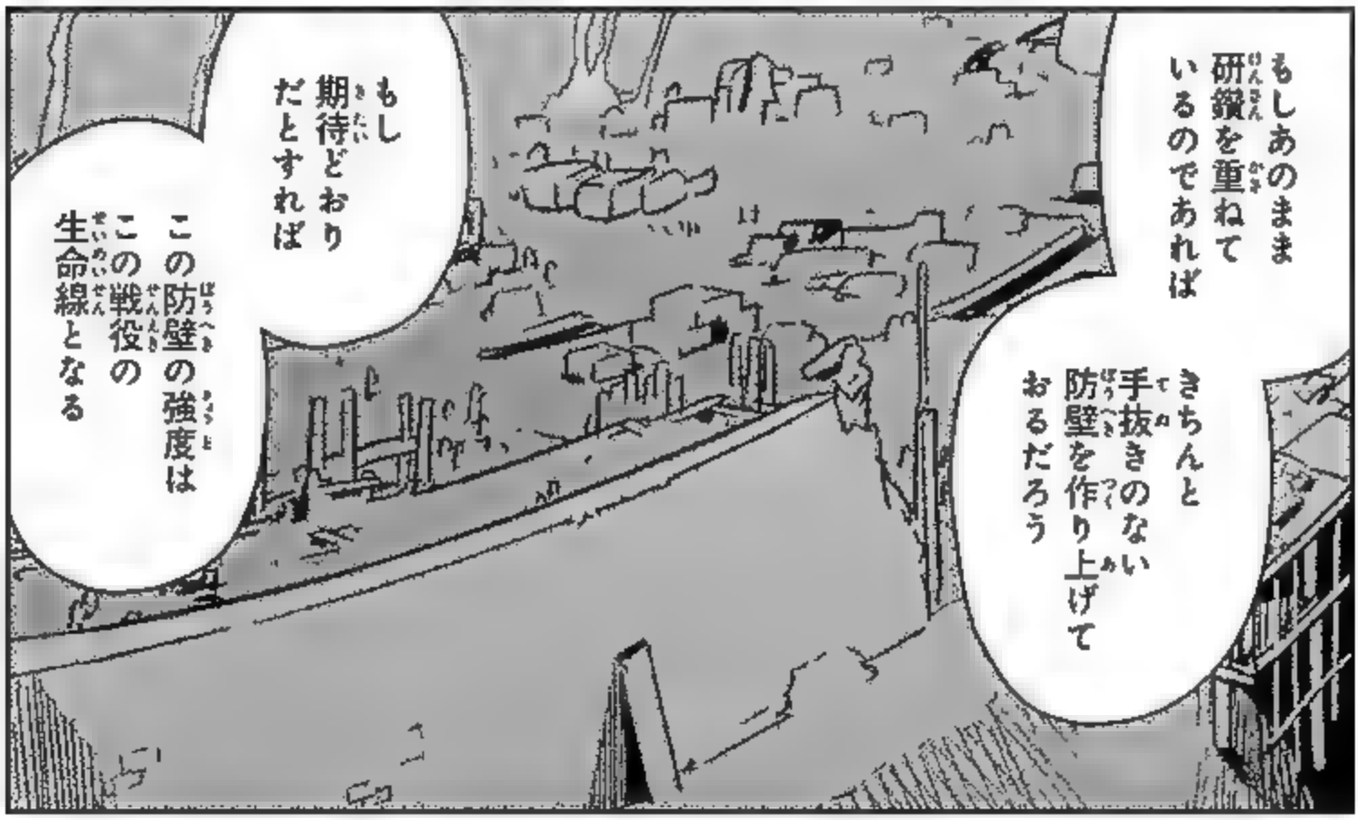
この都市が
再び陥落し戦火に
踏みにじられれば
その怨嗟の声は
千年にわたる
呪いとなって
魔族のみならず
人間族の未来をも
黒い鎖で縛りつける
だろう

この戦を
開門都市で
食い止めるのだ！

寝ぼけた
ような顔をした
鬼呼の大男の
はずだ
魔王殿
その男とは？

誰ぞあるか！
防壁の
責任者を
連れてこい
あの防壁を
設計した男だ

昔
しばらくの間
いろいろなことを
教え込んだ男だ
あまり
使えるのでは
なかったやも…
…なんと！
あの方が
魔王殿の弟子？


もしあのまま
研鑽を重ねて
いるのであれば
きちんと
手抜きのない
防壁を作り上げて
おるだろう
もし
期待どおり
だとすれば
この防壁の強度は
この戦役の
生命線となる

水をくれ
あぁ
ざわ…
おぉ…

ぎゃあああ
ご
ごめんなさい
ごめんなさい

そこの
嬢ちゃん
ひ!?
ごめんなさい

悪いな
ちいと
そっちの端っこを
持ってくれ

ぶはぁ
ダ
ダメですよ！
うるせぇやい
飲まないで
なんの戦だ
また出るつもり
なんですか!?
ったりめぇだ
こいつは
弔い合戦なんだ
俺のダチも
虎の大将も
逝っちまった
俺だけ
止まってるわけには
いかねぇよ
ダメです
…死ぬのは
ダメです
ああ？
…ああ
わかってんよ

ドオン…
！
な！
なんだ
あの音は!?
ドオン
落ち着け！
あれは
「砲撃」だ
火薬で鉄の弾を
打ち出す火砲の
巨大なものだ

大丈夫なのか
俺たちは
ドドーン
この防壁は
丈夫だ
充分な厚さを
とってあるし
砲弾をそらす
傾斜を備えている

時間は
少なかったが
防衛施設や塹壕も
準備されている
だから
落ち着いてくれ！
そうだぞ…
ドオオ

俺たちの
設計士様は
嘘はいわねぇ！
あの摩訶不思議な
場所の石橋だって
最後にはちゃんと
完成させたんだ

おーい！
おーい！

この防壁の責任者はいるか？
この防壁の設計をした男だ
設計？
それは俺だが

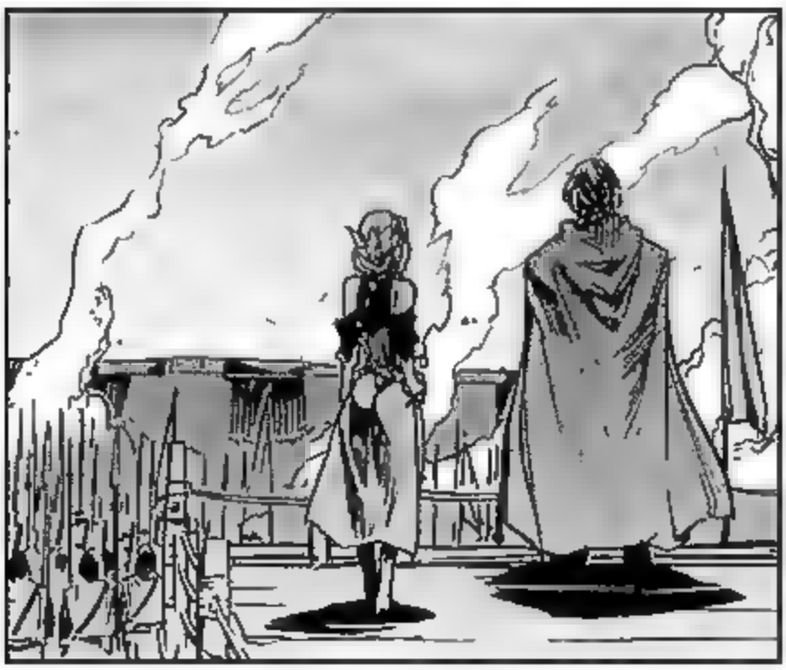
おお！
よかった
あなたのことを魔王様が呼んでいらっしゃいます
魔王様だって!?

と
とんでもない
俺はただの設計者なんだ
そんな偉い人に呼ばれるようなことは

それが魔王様はなんとしてもと仰せで
――どうしてもいやだとおっしゃるのなら
んーと…

「赤い瞳が定規でひっぱたく」と
し

師匠!?



敵の損害は三万
およそ半数を削りました
半数…？
全滅させるとおっしゃったではありませんか
…ある一定の規模の軍が
その戦闘能力を維持するための損害許容の割合はおおよそ三割といわれている
半分も倒れた魔族の軍はもはや事実上壊滅だ

クス…
魔族
クス
クス
…壊滅
よいですわね

しかし
開門都市攻略は
やっかいかも
しれません
どういう
ことです？
従来の城壁を
三時間の砲撃で
壊滅できる
カノーネの砲撃を
半日にわたって
耐えている

…どうやら
あの傾斜を
持った城壁は
普通の
城壁では
なさそうだ

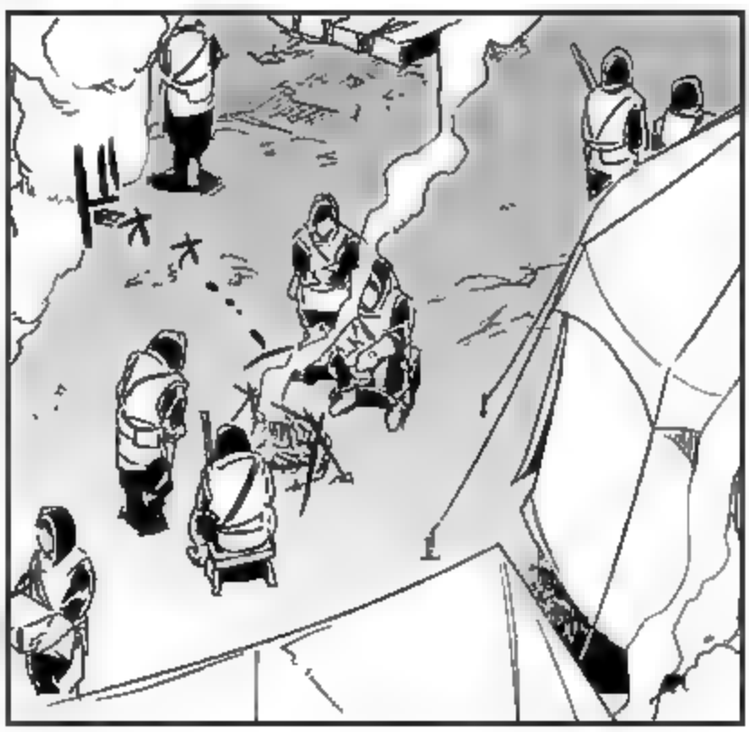
あの黒く
うずくまったような
不細工な外見は
どういう
理屈かは
わからないが
火砲への防御をも
可能にしている
らしいですな

しかし
それならそれで
手は他にもある

カノーネ部隊ー
部隊を
四班編制にするのだ
あの防壁に
間断ない砲撃を
加えよ
は！

あれなる
魔族の街から
安らかな
夜の眠りを
奪い去れ！
ドオン…
ドオオ…ン

ドオン…
ドオオ…ン



…なんか
あっちさんも
必死だっただよ
そうだなぁ

——獣牙は戦士の一族です
故郷と自分たちの主君を守るために
雄々しく誇り高く戦う
どうしてそっただこと…
その耳は！
詩人さん
まさか
詩人さんが魔族…？
——魔族にもいろいろいるんだよ
魔族だって人間みたいなものだから

どうして
こんな…
決めたの
真ん中で
ずっと歌おうって
何を見ても
逃げないって
まだ何をするのか
わからないけれど
そうするって
決めたの
詩人さん
とにかく
耳を隠さないと
詩人さんの
好きなように
するだよ
おらたちは
何が正しいのか
もうわからないけど
詩人さんが
聴かせてくれた曲は
覚えてるから

詩人さんの詩が響くかぎり
おらたちは詩人さんの秘密を守るだよ
ありがとう…

補修用の土嚢を投げておけ！
石灰を撒け
桶に水を用意するのも忘れるな！
今作業をしてもケガが増えるだけだ
夜明けを待とう
わかった…

師匠も師匠だ
魔王だなんて
なんの冗談
なんだよ!?
おかげで俺は
こんなところで
防壁修理班長で
防衛司令だなんて…
ドドドド
まだまだだー
この防壁は
ちょっとや
そっとの砲撃じゃ
崩れやしないぞー
くそう
夜明けが…
遠いなぁ
ドオオ

お前が
帰ってくるまで
この都市を
落とさせたりは
しないからな

…奏楽子弟
無事で
いるか？
望みの詩は
見つけられたか？

魔界南部
旧蒼魔族領地辺境部

は
前方半里ほどの
丘の上に
白旗を立てて
待っております

軍使
だと？

魔族の氏族は？
その…
人間で
あります
人間…
どういうこと
でしょう？
どれくらいの
人数なのだ？
おおよそ
十名ほどかと
見ましたが
丘の麓から
向こうは魔界の
原生林が広がって
おりますので
兵が伏せてある
可能性は否定
できません
元帥閣下
いかが
されますか？
人間か…

ふむ
面白い
会おう

こちらからも
十人ほどを
遣れて
その丘まで
出向くのが
礼儀であろうな
無用な戦闘を
望んでいる
わけではないと
示すためにも

そこまで
下手に出る必要が
ありますか？
相手の正体が
わからぬ以上な

いえ
会って
いただけるの
ならば
こちらの
陣営まで来ると
先方は言って
おります

ははは
度胸がいい
男ではないか

それが
先方は
女性でして…

お招きくださり
ありがとう
ございます

これは
勇壮な軍ですね

王弟元帥だ

そちらの身分
および目的を
聞こう

はい
私は
メイド姉と
申します

身分は…
旅の学士です

目的は
なんなのだ？

終 第四十六話
還らぬ者の名にかけて

第四十四回

城塞都市について

防衛施設で守られた城塞都市。
自分たちの命や財産を守り、
安全に日々を暮らすため
人々が考え出した知恵だった。

都市を囲う防衛施設は、外敵から住民を守るうえで、古くから有効な手段だった。

大陸では必須だった都市の防衛施設

城塞都市とは、周囲を城壁や堀、土塁といった防衛施設で囲んだ都市のことだ。生活の場を堀や柵で囲うという行為は、都市が誕生する以前から行われていた。

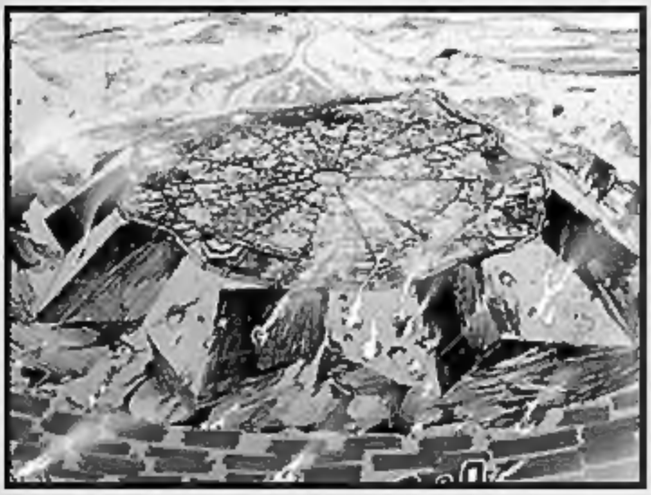
防衛施設の設置は、はじめは危険生物の侵入を防ぐ意味合いだったと考えられる。しかし、農耕が定着したのち、余剰物資の交易によって富が蓄積されるようになると、これを狙うよその人間からも自分たちの共同体を守る必要が生じてくる。

ヨーロッパだけを例にとっても、為政者の覇権争いや異民族との戦いが絶えなかった。領主たちは支配下にある都市の防衛を強化したし、自治権を獲得した都市にとっては富を狙う権力者たちから街を守るうえで、やはり防衛施設は必要だった。さらに東部に住む人々となれば、アジア方面から侵入してくる遊牧民にも備える必要があり、都市の防衛は欠かせなかったのだ。

こうした城塞都市のなかには、現在でも防衛施設が残っているものがある。なかでも南フランスのカルカソンヌはとくに有名だ。この都市は地中海と大西洋を結ぶ要衝にあり、古代ローマ時代にはすでに城塞都市となっている。その後も数多くの戦乱にさらされ、街の拡張とともに防衛施設も強化されていった。こうした防壁や塔は現在でも残っており、１９９７年には歴史ある城塞都市としてユネスコの世界遺産に登録されている。

さて、都市を囲む防衛施設の技術は必要に応じて発展していったわけだが、のちに火砲が登場すると高い防壁は役に立たなくなった。そこで新たに登場したのが星型の要塞だ。星型になっているのは、張り出した角に設置した火砲で、ほかの角の真下にいる敵を迎撃するため。角に配置された者同士が相互に支援できる仕組みなのだ。

こうしたタイプの城塞都市は16世紀以降に登場した。純粋な防衛施設として築かれたものが多いが、なかには都市を内包した大型のものもある。ヴェネツィア軍の拠点となっていたイタリアのパルマノーヴァやオランダのホラント州のナールデンのように、現在でも星型の地形が残されているものもある。



土木子弟が築いた防壁は、衝撃の吸収を重視した厚みのある新しいタイプだった。

突破

獣牙残存兵
準備ができました
いつでも
どうぞ

ざわざわ

頼むぞ
は
了解しました

外に出るとしたら
包囲の完成していない
今しかない

敵の補給線に
攻撃を仕掛けて
きます

ゆくぞ!

角川コミックス・エース
まおゆう魔王勇者「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」（14）

漫画：石田あきら
原作：橙乃ままれ
キャラクター原案：水玉螢之丞・toi8

©Akira ISHIDA 2015
©2011 Touno Mamare

2015年4月25日 発行

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました
角川コミックス・エース『まおゆう魔王勇者「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」（14）』
2015年4月25日初版発行

発行者　堀内大示
発行所　株式会社KADOKAWA
http://www.kadokawa.co.jp/

〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
03-3238-8745（営業）
編集　角川書店
〒102-8078　東京都千代田区富士見1-8-19
03-3238-8719（編集部）

装幀・デザイン：沼利光（D式Graphics）

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。
本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず
本作品を第三者に譲渡することはできません。
本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に
予告なく変更される場合があります。
ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。
この物語はフィクションであり、実在の人物・団体とは関係がございません。